

青年心理研究における現状と課題 (I)

久世敏雄 平石賢二 辻井正次¹⁾

I 青年心理研究の現状

1. 問題と目的

日本の青年心理学は、戦前においては主としてドイツの青年心理学、たとえばビューラー、トゥムリルツやシュプランガーなどの影響を受け、そして戦後においては主としてアメリカの青年心理学の影響を受けてきたとされている。

また、戦後から今日までにおいて、日本の青年心理学の理論構成は、ホールらの重視する生物学的要因とミードらの重視する社会的要因、そしてそれらの両要因を統合するオースベルの理論を経て、世代的要因の重視、コーホートと個別性を理解する視点へと移り変わってきた。そして、エリクソンに示されるような個体発達分化の図式にみられる人格の統合的、全体的な把握を目指してきつつある(久世, 1989 a)。

しかしながら、そのような戦後日本の青年心理学の歴史の中で、数多くの個々の研究は、青年の心理の一機能をとらえているとは言え、それらの研究成果が互いに関連づけられ、体系的に蓄積されてはこなかったように思われる。それは、ひとえにそれぞれの研究において取り扱われている心理学的構成概念が多様であり、なおかつそれらの定義上の問題から研究間の研究成果を結びつけていくことが困難であったためと考えられる。このような青年心理学の現状において求められているのは、それぞれの研究における心理学的構成概念を整理し、それらを青年の意識と行動を理解するための理論的枠組み全体の中で位置付け直す作業であると考えられる。その中には、例えば、しばしば別々の用語で使用されている同一の構成概念をひとつのものとして置き換え、あるいはまた、同一の用語で使用されている異なった構成概念を区別することが求められる。そして、最終的には青年心理学研究において扱われている構成概念の体系を明確にしていくことが課題となると考えられる。

本研究においては、このような問題意識からわが国における青年心理研究を概観し、その現状と課題を明らかにしていくことにする。ここでは、まず始めにわが国における心理学関連学会の学会誌の中で最も歴史のある心理学研究と教育心理学研究に掲載された青年心理研究を分析資料として扱うことにした。そして、特に諸研究で取り扱われている心理学的構成概念を研究対象と研究方法との関連の中で整理することを研究の目的とした。

2. 方法

(1) 分析資料

本研究においては、わが国における青年心理研究の現状と課題について検討するために、心理学研究(第20巻第1号から第60巻第6号まで)と教育心理学研究(第1巻第1号から第37巻第4号まで)に掲載されている研究論文を分析資料として使用することにした。(ここでは、暫定的に第二次大戦以後の青年心理研究を対象とした。)そしてその中から、青年、すなわち中学生年代から大学生年代までを研究対象としているものを選出した。但し、研究対象が青年期年代であるにもかかわらず、研究対象を成人として扱い青年としてみなしていないと思われた研究や、青年期についてまったく考慮していないと思われた研究、あるいは文献研究に関しては、本研究における分析対象としては除外することにした。しかし、青年期に関する考察の有無にかかわらず、青年期発達に関連した構成概念を扱っていると考えられた研究に関しては、分析の対象として含めることにした。

その結果、最終的には418件の論文が分析対象となった。

(2) 分析方法

本研究においては、以下の順序に従って資料の分析を行なった。

①まず第一に、分析資料として選出された研究論文を、研究題目から主な研究領域毎に分類し、そこに該当する研究論文数を検討した。

②第二に、各領域毎に研究の内容を吟味し、主として

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)

研究対象, 研究方法 (特に測定方法), 研究された構成概念の3つの観点から各研究を整理した。

3. 結果と考察

(1) 研究題目からみた青年心理研究における研究領域

まず, はじめに本研究における分析資料として採用された研究論文418件の研究題目の検討を行ない, 研究題目から研究領域を整理してみることにした。一般に研究題目は, 複数の心理学用語を含んでいることが多いが, その場合には, 複数の領域に属するものとして扱った。その結果, 表1に示される領域が明らかになった。

表1は, 研究題目から得られた研究領域と, それに属する論文件数, ならびにその領域との関連が検討された他の領域を表わしている。ここで, 示された研究領域は, 必ずしも一つの基準から選出された整合性の高いものではなく, 暫定的に示された研究領域である。この研究領域を整理するにあたって採られた基準は, まず, 青年心理学, あるいは他の心理学の構成概念として明確なもの選出ということであった。例えば, 「自我・自己」, 「性役割」, 「依存と独立」, 「道徳判断・道徳意識」, 「成人特性」, 「非行」などがそれに相当する。次の基準としては, いくつかの構成概念を包含する上位の基準の設定を考慮した。例えば, 「身体性」, 「対人関係」, 「生活感情・情緒」, 「態度」, 「認知的発達」, 「価値」, 「職業選択・進路選択」がそれに相当する。これは, 1番目の基準が適用できない場合に行なった。そして, 最後にこれら2つの基準によっても整理することが困難と思われた研究を, それ以外の基準として採用した日本教育心理学会における教育心理学本邦文献目録の分類基準によって整理した。「学習と指導」, 「測定と評価」がそれに該当する。

以上の分類基準によって整理された研究領域を概観すると, 結果として「自我・自己」, 「対人関係」, 「認知的発達」の3つの領域において研究が集中していることがうかがわれる。また, 領域をまたがって数多くの研究がなされていることも示唆されている。しかし, この研究領域の分類はあくまでも研究題目から暫定的に示されたものであり, 実際に研究された構成概念がここで示されているとは言いがたい。そこで, 次にこの表1で得られた各領域毎に詳細に研究を吟味していくことにしたい。

(2) 各研究領域における研究対象・研究方法・構成概念

ここでは, 表1によって示された各研究領域毎に論文を吟味し, 主として研究対象, 研究方法, そして測定されている構成概念の3つについて焦点を絞り, その研究領域における特徴を明らかにしていくことを目的として

いる。しかし, 本論文においては, 紙数の都合上, 「1. 自我・自己」から「7. 態度」までの結果を分析し, 結果を考察することにした。本論文で扱うこれらの研究領域は, 主に身体発達に関する領域と, 人格発達, 社会性発達に関する領域であり, 認知的発達に関する領域とその他の領域に関しては, 第Ⅱ報において発表することにする。また, 個々の領域において吟味された, 青年心理研究における現状の総括と, そこで扱われている構成概念を体系的にとらえ整理する, という本研究における本来の目的も, 第Ⅱ報において検討することにする。

①自我・自己

自我・自己に関する研究は, 「自我発達」, 「自己開示」, 「自己概念」, 「自己評価」, 「その他」に分類し, 整理することが出来た(表2-1~表2-5を参照)。

自我発達 自我に関する研究は表2-1に示されるとおりである。大きく分類すれば, エリクソンの「自我同一性」理論に基づいた自我同一性研究と, レビンジャーの「自我発達」理論に基づいた自我発達研究の2つが, 主流であると言える。特に, 自我同一性研究については, エリクソン理論を実証的研究のレベルで展開させたマーシャの「自我同一性地位」という構成概念が多くの研究で扱われている。

しかし, 自我同一性の測定法については, いくつかの異なった測定法が挙げられる。ひとつは, 半構造化面接の結果を元に自我同一性地位を研究者側で評定する方法。この方法においても扱う内容領域に関しては, 研究者により若干異なっている。また, 質問紙によって得られた回答を元にして, 自我同一性地位を判定する方法もある。質問紙を利用した研究では, 加藤(1986)が「自我同一性次元」と呼ぶ, 自我同一性の達成度あるいは混乱度を測定する一次元的な測定が数多く存在する。しかし, 測定される内容領域は, 様々で必ずしも一貫してはいない傾向がある。また, 研究対象は大学生に集中しており, 青年期前期, 中期が対象から外されている傾向が認められる。

いずれにせよ, 自我同一性の測定は, 面接法や質問紙によって得られた被験者のその時点での意識, 自己に対する認知および評価を元にして, 判断する形式をとっており, 間接的に「自我同一性」なる構成概念に接近しようとしている。

自我発達に関しては, また別の測定法により研究が進められている。文章完成法による研究がそれである。佐々木(1981), 渡部・山本(1989)では, 衝動統制, 性格発達ほか, 多くの基準から自我発達をとらえようとして

表1 研究題目からみた青年心理研究の領域とその論文件数

研究領域	論文件数	他の研究領域との重複(括弧内論文件数)
1. 自我・自己	64	性役割(1) 依存と独立(1) 対人関係(25) 生活感情と情緒(2) 欲求・動機づけ(4) 認知的発達(3) 学習と指導(3) 非行(1) 測定と評価(11) その他(1)
2. 身体性		
1) 性徴・成熟	5	性役割(2) 測定と評価(2)
2) 性的発達	1	
3) その他	3	依存と独立(1) 測定と評価(1)
3. 性役割	14	自我・自己(1) 身体性(2) 対人関係(3) 職業選択・進路選択(1)
4. 対人関係		
1) 親子関係・家族関係	22	自我・自己(1) 性役割(2) 態度(1) 価値(3) 対人関係(1) 職業選択・進路選択(5) 学習と指導(1) 非行(1) 測定と評価(2)
2) 友人関係	4	自我・自己(1) 対人関係(1) 学習と指導(1) 測定と評価(1)
3) 異性関係	2	自我・自己(1) 対人関係(1)
4) 対人認知・対人感情・社会的行動・対人的行動	67	自我・自己(22) 性役割(2) 道徳判断・道徳意識(1) 生活感情・情緒(4) 対人関係(5) 職業選択・進路選択(2) 欲求・動機づけ(2) 認知的発達(2) 測定と評価(3)
5) 集団力学	16	態度(1) 生活感情・情緒(1) 対人関係(2) 職業選択・進路選択(1) 認知的発達(1) 測定と評価(1) その他(1)
5. 依存と独立	8	自我・自己(1) 身体性(1)
6. 生活感情・情緒		
1) 孤独感・疎外感	8	自我・自己(2) 対人関係(1) 認知的発達(1) 測定と評価(1)
2) 充実感	1	
3) 情緒・その他	15	対人関係(4) 欲求・動機づけ(1) 認知的発達(1) 地域研究(1)
7. 態度		
1) 社会的態度	8	対人関係(1)
2) 政治的態度	7	職業選択・進路選択(1) 測定と評価(2)
3) その他	13	対人関係(1) 職業選択・進路選択(1) 測定と評価(1)
8. 認知的発達		
1) 時間評価	11	認知的発達(6) 測定と評価(1)
2) 学習	13	
3) その他の知覚・認知	65	自我・自己(3) 価値(1) 生活感情・情緒(2) 対人関係(3) 認知的発達(6) 学習と指導(4) 地域研究(2) 測定と評価(4)
9. 価値		
1) 恩意識・礼儀意識	3	
2) 権威意識	2	対人関係(1)
3) 規範意識	1	対人関係(1)
4) 価値・興味	8	対人関係(1) 職業選択・進路選択(1) 認知的発達(1) 測定と評価(2)
10. 道徳判断・道徳意識	6	対人関係(1) 測定と評価(1)
11. 欲求・動機づけ	13	自我・自己(4) 生活感情・情緒(1) 対人関係(2) 地域研究(1) 測定と評価(1)
12. 学習と指導		
1) 教科教育・学習指導法	17	認知的発達(2) 学習と指導(7)
2) 学習適性・学業不適応	11	自我・自己(1) 学習と指導(7)
3) 教授・学習過程	2	
4) その他	22	自我・自己(2) 対人関係(2) 認知的発達(2) 学習と指導(2) 地域研究(1) 測定と評価(3)
13. 職業選択・進路選択	18	性役割(1) 態度(2) 価値(1) 対人関係(8) 測定と評価(2)
14. 成人特性	2	
15. 非行	15	自我・自己(1) 対人関係(1) 測定と評価(4)
16. 地域研究	10	生活感情・情緒(1) 欲求・動機づけ(1) 認知的発達(2) 学習と指導(1) 測定と評価(1)
17. 測定と評価		
1) パーソナリティ	43	自我・自己(4) 身体性(2) 態度(3) 価値(1) 生活感情・情緒(1) 対人関係(6) 職業選択・進路選択(2) 欲求・動機づけ(1) 認知的発達(3) 学習と指導(3) 非行(2) 地域研究(1) 測定と評価(2)
2) 方法	32	自我・自己(7) 身体性(1) 価値(1) 道徳判断・道徳意識(1) 認知的発達(2) 非行(2) 測定と評価(1)
18. その他		
1) 臨床的問題	6	自我・自己(1) 対人関係(1)
2) 留学生の適応	2	

いる。しかし、ここで言う自我とは、人格とほぼ同義の概念であるとも考えられる。

他方、堀尾(1973)は質問紙とロールシャッハテストによって、自我強度を測定しようとしている。ここでは、特に自我の機能面に焦点を当てていると考えられ、とりわけ、ロールシャッハテストでは、自我の認知機能を直接的に測定しようとする試みであると言える。

以上に示されたように、「自我」という構成概念は必ずしも一定した定義を持たず、また、間接的な形で接近されることが多いのが現状であると思われる。

自己開示 自己開示に関する研究は、表2-2に示されるとおりである。表に示される自己開示研究は、2つに分類することが出来る。1つは、対人魅力に関連する一要因として自己開示を扱っている研究である(相川・大城・横川, 1983; 中村, 1984; 中村, 1986)。ここでは、自己開示は主として他者の側の行動としてとらえられている。また、この一群の研究は社会心理学研究の流れの中にあり、社会的相互作用過程や認知的過程は問題にするものの、青年期発達に関する考慮はほとんどなされていないのが実状である。

2つめは、研究対象である青年の側の自己開示を扱った研究である。ここでは、開示の側面や開示の状況、意向、量、動機などが問題にされている。これらの研究は質問紙による測定に限られているが、概念的には一貫性が保たれているように思える。しかし、対象は大学生に限られており、研究数も少ない傾向にある。

いずれにせよ、自己開示という構成概念は、対人行動における一側面であり、主体的機能としての自我や認知された対象としての自己とは、異なったものであると考えられる。しかし、質問紙によって測定されている自己開示は、認知された自己の対人行動の一側面であり、その意味では自己として扱うことは出来る。

自己概念 認知された対象としての自己に関する研究は、自己概念、自己認知、自己評価といった構成概念の元で行なわれている。自己に対する認知は、一般になんらかの評価的側面が付与されていることが多く、その意味で自己概念と自己評価とを完全に分離することは出来ない。しかし、ここでは自己評価を強調した研究は独立させ、それ以外の研究は自己概念として扱うことにした。

自己概念研究は、表2-3に示されるとおりである。表に示されるように、自己概念研究においては、様々な自己の内容面、側面を問題にしている。一貫しているのは、自己が認知されている対象であるという点であり、その内容面に関しては制限されていない。そのため、そ

れぞれの研究は、焦点づけられた内容に関しての研究であると言い替えることが出来る。例えば、自己の身体特徴に関する研究は、身体性に関する研究であるというのと同じである。しかし、それはあくまでも認知された、意識された自己であるという点で限定されている。この自己の諸側面をどのように整理していくかが、この領域における問題として挙げられよう。

しかし、諸研究を整理しようとする際、いくつかの分類を試みることは可能である。1つは、諸々の自己(現実自己、理想自己、他者自己等)の構造を扱う研究群である。これらの研究はこの自己の一貫性を適応の指標として扱うことが多い。2つめは、認知された自己の内容面と構造面を発達的にとらえ、それにより、背景にある認知発達の側面に接近する研究である(特に山田(1989))。また、自己概念を安定性や、一体性・分離性といった次元でとらえ、その視点から自己概念の構造を検討する試みも見受けられる。この点では、共通した幾つかの次元を設定することが可能であるかが、構成概念としての共通性を問題にする上で重要な視点となると考えられる。

また、岩熊・楨田(1989)は、個人の自己概念の構造を問題にし、遠藤(1987)は理想自己を認知構造とみなし、情報処理過程という認知的側面を強調している。これらの視点は、自己概念研究においては、今後重要になると考えられる。

以上のことを整理するならば、自己概念研究は、内容面の構造、諸自己の構造、次元性の問題、認知発達・認知過程の側面などが研究の重要な視点となっていると言える。

自己評価 自己評価に関する研究は、表2-4に示されるとおりである。表で示された自己評価の研究では、自己評価を対人関係場面の中で関連づけ、その認知過程、社会的比較過程などを実験的に扱う研究が目立っている。その他にも、両親の養育態度や対他者関係(友人関係の良好さ)などの対人関係面との関連を見ているものが多い。また、他方では自己評価の動機的側面を扱っているものも見受けられる。しかし、全般に自己評価の発達の側面を考慮していない傾向がうかがえる。

別の領域としては、自己評価の下位概念であると考えられる、自己受容に関する研究がある。宮沢(1988)は、自己受容の発達を縦断的研究によって検討している。これは、上記の研究に欠けている視点であり、自己評価が発達的にはどのように変容していくかという問題に取り組んでいる。しかし、この自己受容という概念は、更に下位の概念として様々な内容を含んでおり、それは必ず

表2-1 自我・自己に関する研究(1) -自我発達-

著者	年号	方法	対象	測定された概念
無藤 清子	1979	半構造化面接・評定	大学生(男子)	自我同一性地位(職業, 政治, 価値観)
加藤 厚	1983	質問紙	大学生(男女)	自我同一性地位(職業, 政治的イデオロギー, 宗教的イデオロギー, 家族との関係, 同性の友人との関係, 異性の友人との関係, 男らしさ・女らしさ, 勉強, 趣味, 社会的態度および活動, 生き方や価値: 自己認知, 自己評価の側面から自我同一性地位を判定)
加藤 厚	1986	質問紙	大学生(男女)	自我同一性地位(加藤 [1983] に同じ)
加藤 厚	1989	質問紙(4・6件法)による縦断的研究	大学生(男女)	自我同一性次元(自我同一性の混乱)・成立: 自己認知, 自己評価の側面)
高橋 裕行	1988	半構造化面接・評定 質問紙	大学生(男女)	自我同一性地位(職業, 価値観, 性役割: 半構造化面接と評定により測定), 親密性地位 自我同一性(質問紙により測定, 自己認知, 自己評価の側面)
山本 里花	1988	質問紙(SCT形式の項目を含む)・評定	大学生(女子)	自我同一性地位(性, 母との相互作用, 価値観, ライフプラン, 宗教, 政治, 充実感: 自己認知, 自己評価の側面から自我同一性地位を判定) 一体性・分離性(山本 [1989] に同じ)
砂田 良一	1979	質問紙(3件法) Self-Differential法	大学生(男子)	自我同一性混乱(時間混乱, 自意識過剰, 役割固着, 労働麻痺, 同一性混乱, 両性の混乱, 権威混乱, 価値混乱: 自己認知, 自己評価の側面)
松田 君彦 広瀬 春次	1982	質問紙(3件法) Self-Differential法	中学生・高校生・大学生 (いずれも男女)	自己像(向性, 情緒安定性, 強靱性, 誠実性, 過敏性, 理想性因子: 現実自己, 理想自己, 家族から見た自己・大学生活での周囲の人から見た自己, 世間の人から見た自己, 家族から望まれている自己, 大学生活での周囲の人から望まれている自己, 世間の人から望まれている自己)および自己像のずれ(適応の指標として)
宮下 一博	1987	質問紙(2・3・4 ・6件法)	大学生(男女)	自我同一性(質問紙により測定, 自己認知, 自己評価の側面), 自我同一性混乱(砂田 [1979] に同じ), 特性不安(質問紙により測定), self-esteem(自己の能力・意見に対する肯定的確信, 自己の人生に対する肯定的態度, 独立・同情排除, 劣等感, 自己のパフォーマンス力や能力の肯定的受け入れ: 自己評価)
佐々木正宏	1981	SCT・評定	中学生・高校生・大学生 ・大学院生・勤労青年 (いずれも女子)	自我発達(衝動統制, 性格統制, 対人関係スタイル, 意識的とらわれ: 自己像, 両親像, 関心や懸念, 対人関係等の側面についての意識の在り方から自我発達を推測)
渡部 雅之 山本 里花	1989	SCT・評定	小学生・中学生・高校生 ・大学生・成人 (いずれも男女)	自我発達(佐々木 [1981] に準ずるが, 認知様式もつけ加えられている。)

長尾 博	1989	質問紙 (3・5件法)	中学生・高校生・大学生 (いずれも男女)	自我発達上の危機状態 (決断力欠如, 同一性拡散, 自己収縮, 自己開示対象の欠如, 実行力の欠如, 親とのアンビバレント感情, 親からの独立と依存のアンビバレンス, 緊張とその状況の回避, 精神衰弱, 身体的痛み, 希な体験や精神・身体的反応, 閉じ込め, 身体的疲労感, 対人的過敏性, 自己認知, 自己評価の側面)
矢吹 省司	1971	面接法, 知能検査, ロールシミュレーション (事例研究法)	幼稚園児 (男子)・小学生 (男女)・高校生 (男 子)・大学生 (女子)	学業不振, 自我防衛 (自我発達)
堀尾 治代	1973	質問紙・ ロールシミュレーション	宗教団体修養科生 (18-65才の男女)	自我強度 (症状)の欠如, 宗教的態度・自己信頼, 自由な道徳的態度, 身体的機能・生理的安定性, 現実感覚, 恐怖症 的傾向の欠如, およびロールシミュレーションに対する知覚的反応: 自己認知, 自己評価の側面と知覚
岡田 努	1987	Self-Differential 法 (7件法) 質問紙 (2・4件法)	中学生・高校生・ 大学生 (いずれも男子)	自我理想 (現実自己, 理想自己, 友人像の差異あるいは相関関係によって測定。いずれも, 向性, 誠実性, 強靱性因 子からなる。) 自己評価 (self-esteem) 自己に対する満足した受容 (自己受容, 心身の健康さの感覚)

表2-2 自我・自己に関する研究(2)-自己開示-

著者	年号	方法	対象	測定された概念
相川 充 大城トモ子 横川 和章	1983	質問紙 (実験法)	大学生 (女子)	自己開示 (内密度・限定性: 実験者の自己開示), 自己認知 (対人場面で相手が自分をどのように認知していると感じるか。: 質問紙による測定), 対人魅力 (対人印象も含む: 質問紙による測定), 返報性 (質問紙による測定) ※青年期発達に関する考察はなされていない。
中村 雅彦	1984	質問紙 (実験法)	大学生 (男子)	自己開示 (内面性・帰属: 実験者の自己開示; 内面性・時間: 被験者の自己開示, 行動評定による), 対人魅力 (対人印象も含む: 質問紙による測定) ※青年期発達に関する考察はなされていない。
中村 雅彦	1986	質問紙 (実験法)	大学生 (女子)	自己開示 (内面性・望ましさ: 実験者の自己開示, 帰属: 被験者による実験者の開示の動機に関する帰属, 質問紙による測定), 対人魅力 (質問紙による測定) ※青年期発達に関する考察はなされていない。
榎本 博明	1987	質問紙	大学生 (男女)	自己開示 (開示の側面 (精神的自己・身体的自己・社会的自己・物質的自己・血縁的自己・実存的自己), 開示の相手 (父・母・最も親しい同性の友人・最も親しい異性の友人))
遠藤 公久	1989	質問紙 (3・4・5・ 6・7件法)	大学生 (男女)	自己開示 (開示状況・開示意向), 孤独感, 神経症的傾向, 自意識 (公的・私的), self-esteem, 向性, セルフ・モニタリング ※ 自己認知, 自己評価の側面を測定。
小口 孝司	1989	質問紙	大学生 (男女)	自己開示 (自己開示量, 自己開示動機 (意図性・規範性・感情性), パーソナリティ判断およびその一致度 (開示者・被開示者による質問紙評定から測定)

表2-3 自我・自己に関する研究(3)-自己概念-

著者	年号	方法	対象	測定された概念
吉川房枝	1960	作文質問紙(自由記述)	中学生・高校生(いずれも男女)	自己認知(身体的特徴, 内的特徴, 対人関係, 生活態度の側面), 自己評価(好ましい自己・好ましくない自己: 身体・動作, 技能・興味, 性格・人格, 対人感情・態度, 自己抑制等の側面), 他者の自己への評価の認知(他者自己: 親, 同胞・親戚, 友人, 先生, 近所の人の評価)等
栗原輝雄	1971	質問紙(実験法)	中学生・高校生(肢体不自由児, 男女)	自己概念(現実自己, 肯定的自己, 否定的自己: 各々, 身体的自己, 社会的自己(指導性, 責任感, 一貫性, 協調性, 他者理解, 公正さ, 自己理解, 知能, 意志, 身だしなみ)の側面を測定), 自己概念安定性(肯定的自己と否定的自己の差異によって測定), 目標設定行動(要求水準行動)
加藤隆勝 高木秀明	1980a	質問紙(3件法)	中学生・高校生・大学生(いずれも男女)	自己概念(自己認知・自己評価: 反社会性, 意欲性・活動性, きちようめんさ・清潔さ, 明朗性・友好性, 情緒性, 誠実さ)
加藤隆勝 高木秀明	1980b	質問紙(5件法)	中学生・高校生・大学生(いずれも男女)	独立意識(独立性, 親への依存性, 反抗・内的混乱: 自己認知・自己評価), 自己概念(反社会性, 意欲性・活動性, きちようめんさ・清潔さ, 明朗性・友好性, 情緒性, 誠実さ: 自己認知・自己評価)
下仲順子	1980	SCT・評定	大学生・老人(いずれも男女)	自己認知(家庭, 友人, 健康および老化, 過去・現在・未来の自己, 不安・懸念, 価値観等の側面), 自己評価(自己認知のそれぞれの側面について, 肯定感情・否定感情・中立感情・肯定否定等に分類)
山本真理子 松井豊 山成由紀子	1982	質問紙(5件法)	大学生(男女)	自己認知(社交・スポーツ能力・知性・優しさ・性・容貌・生き方・経済力・趣味や特技・まじめさ・学校の評判の各側面), self-esteem(自己評価) ※自己認知と自己評価との関連を検討。
山田ゆかり	1989	20答法	小学生・中学生・高校生・大学生(いずれも男女)	自己概念(自己認知・自己評価: 自己認知(自己の特性-客観的属性, 性格, 対人的態度, 身体・健康状態, 容姿, 能力・適性, 日常生活・習慣, 生活感情, 信念・価値観, 対環境内事象・事象関係-職業, 勉学, 学校生活, 食物・衣服, 金銭・所有物, 対人関係-両親, 家族, 友人, 教員, 異性, 不特定の人, その他), 自己評価(評価と願望)) ※自己概念の内容面と構造面の分析
岩熊史朗 槇田仁	1989	WAI(20答法)(実験法)	大学生(男女)	自己認知・自己評価(家族, 友達, ゼミ, サークル, 学業, 趣味, アルバイト, 日常生活, 身体, 性格, 能力, 考え, 自信, 劣等感, 幸福感, 不満, 願望, 後悔, あきらめ, 自分らしさ) ※個人の自己イメージ(自己概念)の構造化
山本里花	1989	質問紙(4件法)	高校生・大学生・成人(いずれも男女)	一体性(他者欲求への敏感さとその充足の優先, 社会的能動性, 共感・融合能力: 自己認知・自己評価)・分離性(自己主張の強さ, 他者・状況からの分離性, 自由な自己表出: 自己認知・自己評価), self-esteem(自己受容, 自信・プライド: 自己評価)
加藤隆勝 返田健	1961	Q分類	大学生(男女)	自己像(現実自己・理想自己: 自己認知・自己評価), 理想的異性像, 自己像・異性像の差異 ※いずれも知能, 一般的教養, 健康, 情緒気質, 社会性, 道徳性の各側面について測定
崔光善	1985	質問紙(SD法, 12対の15段階評定尺度)(実験法)	日韓高校生(女子)	現実自己・理想自己(自己認知・自己評価), 親友像, 現実自己と理想自己の差異, 教師からの評価(実験的に操作された独立変数)等 ※日韓の比較文化研究
遠藤由美	1987	質問紙(実験法)	大学生・大学院生(いずれも男女)	現実自己・理想自己(自己認知・自己評価), 認知構造(情報処理過程) ※理想自己を認知構造とみなし, その構造的特性と情報処理過程における役割を検討

表2-4 自我・自己に関する研究(4)-自己評価-

著者	年号	方法	対象	測定された概念
梶田 叡一	1967a	質問紙・作文 (実験法)	高校生(男子)	自己評価(自己および自己のパフォーマンスに対する評価)、他者からの評価(実験的に操作された独立変数)、他者からの評価の認知、対人魅力、およびこれらの関連から認知過程を検討
斎藤 勇 井上 隆二	1971	質問紙(実験法)	専門学校生(女子)	自己評価、対人行動(協同的行動・競争的行動)
長戸 啓子	1973	質問紙 ニアソシオメトリックテスト (実験法)	中学生(男女)	実験的に操作された変数→自己評価、協同・競争事象、コミットメント 従属変数→他者に対する態度(対人的態度)、他者の能力の評価 ※認知過程の検討
菅 佐和子	1975	SD法 ソシオメトリックテスト	小学生・中学生・高校生 (いずれも男女)	self-esteem(現実自己、理想自己、およびその差異：自己評価)、対他者関係(友人関係の良否)
高田知恵子 高田 利武	1976	質問紙 (実験法)	専門学校生・大学生 (いずれも男女)	社会的比較過程(情報の比較・規範的比較：能力(成績)の自己評価に及ぼすモデルの影響から検討)
佐々木正人 福島 脩	1979	実験法	大学生(男女)	自己強化学習、自己評価基準
徳田完二	1987	質問紙(5件法) 親子関係診断尺度(EICA)	高校生(男女)	自己評価、両親の養育態度(情緒的支持・同一化・統制性・自律性：子どもの側からの認知・評価)
塚野 州一	1987	質問紙(選択技法)	小学生・中学生 (いずれも男女)	自己評価(現在、過去、未来)、時間展望、価値
磯崎三喜年 高橋 超	1988	質問紙	小学生・中学生 (いずれも男女)	self-esteem(自己評価)、教科への関与度、学業成績、友人選択(心理的近さの認知)、自己評価維持機制(教科関与度の違い毎にみた自他の学業成績評定および実際の学業成績の差異から判定)
岡田 努 永井 撤	1990	質問紙(7件法)	中学生・高校生・大学生 (いずれも男女)	自己評価(self-esteem)、対人恐怖の心性(対人状況における行動の諸特徴、関係的自己意識、内省的自己意識)
越 良子	1990	質問紙、その他 (実験法)	大学生(女子)	自尊欲求(自己評価維持機制：実験的に操作された独立変数)、自己認知、他者認知、セルフ・イメージ・バイアス ※自尊欲求が他者認知過程に及ぼす影響を検討
川岸 弘枝	1972	SD法 YG性格検査 Self-Differential法 (実験法)	大学生・大学院生 (いずれも男女)	自己受容(社会的受容、個人的受容、満足度、理想自己と現実自己の差異：自己認知・自己評価)、他者受容、適応性(YG性格検査による測定)
宮沢 秀次	1988	質問紙(4件法)による 縮断的研究	中学生(女子)	自己受容(自己理解、自己承認、自己価値、自己信頼：自己認知・自己評価)
斎藤久美子	1959	質問紙(5件法)	大学生・神経症患者 (いずれも男女)	自己意識(現実自己、理想自己。それぞれ身体的側面、社会的側面(社会的外向性・対人関係・対社会的自己内省)、精神的側面(気質的特性・意志的特性・実行性・自己に対する基本的態度・自己批判)を測定。：自己認知・自己評価)、適応性(現実自己と理想的自己の差異により測定)
椎野 信治	1966	Self-Differential法 YG性格検査	大学生(男女)・精神分裂病者(男子)	自己概念(現実自己、理想自己、他者自己(友人・母親・父親からみた自己)、およびそれらの差異、いずれも意欲性・強靱性、情動安定性、社会性、敏感性、緊張性、理知性の側面を測定：自己認知・自己評価)、適応性(YG性格検査による測定)
宮野 祥雄	1981	Q分類	非行少年・中学生 (いずれも男女)	自己概念(3要因(社会的自己、意志、自己評価)、8領域(将来への展望・合理化・責任感・愛他心・疎外感・家族・逸脱への抵抗感・自己統制)について測定：自己認知・自己批判)、非行

表2-5 自我・自己に関する研究(5) - その他 -

著者	年号	方法	対象	測定された概念
高橋たまき	1961	質問紙 (実験法)	中学生 (男女)	自己保護, 要求水準決定, コンプリクト (接近-回避葛藤)
岩下 豊彦	1963	質問紙 (実験法)	大学生 高校生 (女子)	対人知覚, 対人感情 ※自己認知, 自己評価, および理想自己の側面も含まれている。
岩下 豊彦	1964	質問紙 (実験法)	高校生 (女子)	岩下 (1963) に同じ
上田 吉一	1964	クレペリン内田精神 作業検査 質問紙	中学生 (男女)	人格の健康性 (クレペリン内田精神作業検査によって測定), 能力認知 (自己および他者: 数学の試験の予想点と実際の点数との差異によって認知の正確さを判定)
蘭 千 壽	1982	質問紙 ソシオメトリック ・テスト (実験法)	大学生	他者評価 (受容条件・拒否条件: 実験的に操作された独立変数), パフォーマンス評価 (自他のパズル作品に対する評価), 対人的好悪感情 (対人認知), 社会的相互作用
今井 芳昭	1982	質問紙 (実験法)	大学生 (男子)	勢力保持者・勢力行使, 勢力保持者の自己評価・他者 (作業員) 評価・統御の所在の認知 (指示・命令, 報酬欲, 向上心), 対人関係認知 (心理的距離) ※勢力保持者における認知過程の測定
岩淵 千明 田中 国夫 中里 浩明	1982	質問紙	大学生 (男女)	self-monitoring (外向性, 他者志向性, 演技性: 自己認知・自己評価), 自己意識 (公的自意識, 私的自意識, 社会的不安: 自己認知・自己評価), self-esteem (自己評価), 外向性 (自己認知・自己評価)
菅原 健介	1984	質問紙 (7 件法)	大学生 (男女)	自意識 (公的・私的), 対人不安意識 (対人関係での緊張, 集団への溶け込めなさ, 多勢の人の圧倒, 人とのくつろげなさ, 目が気になる, 変な人にも思われる), 自己顕示性 ※いずれも自己認知・自己評価
諸井 克英	1985	質問紙 (4 件法)	高校生 (男女)	孤独感 (自己認知), self-esteem (自己評価), 自己意識 (公的自意識, 私的自意識, 社会的不安), self-monitoring ※いずれも自己認知・自己評価の側面を測定していると考えられる。
中村 薫	1986	質問紙 (4・5 件法)	大学生 (男子)	孤独感 (自己認知), 原因帰属 (自己の孤独に対する原因帰属および他者の孤独に対する原因帰属: 努力の欠如, 排他的環境, 性格の悪さ, 機会の欠如)
菅原 健介	1986	質問紙 (5 件法・選択肢法)	大学生 (男女)	欲求 (賞賛獲得, 拒否回避: 他者からの評価に関する欲求), 自己意識 (公的・私的), 自己評価 (self-esteem), 集団への帰属希求
加藤 和生	1987	質問紙 記憶テスト (実験法)	看護学校生 (女子)	記憶 (人格特性語の再生・再認), 向性度 (人格特性語における向性 (内向・外向), 自己認知による向性), 人格特性の好みさの判断, 自己照合処理, 自己関連性, 自己関与 ※認知過程
崔 光 善	1987	質問紙 (実験法)	高校生 (男女)	教師期待, 自己期待 (自己のパフォーマンスについての期待 (一般期待・特定期待)), 他者認知 (生徒による教師の態度 (態度・有能性・情緒反応・熟知度) の認知), パフォーマンス (一般的行動 (講習受講態度, 熱心さ, 清潔さ, 規律性, 礼儀性) など。教師による行動評定。), 学習課題遂行 (記銘力テスト)), 社会的相互作用過程 ※認知過程
下斗米 淳	1988	質問紙 向性検査 (実験法)	大学生 (男女)	自己概念変容 (向性, 情緒安定性, 強靱性, 誠実性, 過敏性, 理性性), 社会的フィードバック情報 (整合条件・不整合条件), 向性 ※社会的相互作用過程, 認知過程
山口 素子	1989	質問紙 (7 件法)	中学生・高校生・大学生 (いずれも男女)	性役割期待 (自己期待→理想自己, 他者期待 (母親・父親・社会) →他者認知, 社会の認知) ※価値の側面を含んでいる。

しも一貫していないような傾向が見受けられる。

これは、自己評価研究における共通の課題であり、自己評価に内在する肯定性・否定性の次元が、内容に関してはどの様なものを含んでいるかという点について、体系的に整理されていないためであろう。

自己評価に関して、最後に付け加えるならば、適応性との関連を挙げることが出来る(斎藤, 1959; 椎野, 1966; 宮野, 1981)。自己評価は、しばしば適応性との関連で研究されており、自己評価という概念そのものが適応性の概念を内包しているかのように扱われる場合がある。この傾向は、自我発達に関する長尾(1989)の研究においても示されている。

その他 その他の自我・自己に関する研究は表2-5に示されるとおりである。ここでは、自己という概念が既に眺めてきた研究とは若干異なった意味で使用されている傾向がある。自己保護(高橋, 1961)、公的自意識・私的自意識(岩淵・田中・中里, 1982; 菅原, 1984; 菅原, 1986; 諸井, 1985)、self-monitoring(岩淵・田中・中里, 1982; 諸井, 1985)などがそれである。

②身体性

身体性に関する研究は、表3に示されるとおりである。他の領域と比較しても、研究数がかなり少ないことが伺える。この領域においては、身体面として身体成熟度あるいは身体発育、性徴(第二性徴)が問題となっており、様々な測定方法、測定基準によってこれらが測定されている。また、心理面としては、性的発達(性的態度・性的意識・性的行動・性役割)などが問題にされ、身体の発達との関連が扱われている。

③性役割

性役割に関する研究は、表4に示されるとおりである。この領域では、性度、性役割観、性役割期待、性役割受容、性役割実現度などが構成概念として挙げられる。これらは、一般に自己に対する認知の側面と、他者や社会に対する認知の側面に分類することが出来ると考えられる。また、認知の側面には、認知発達の影響を受けている部分と、評価次元が中心になっている部分とに分けることが出来る。更に、認知発達としては、価値観の発達を包含していることが考えられる。

④対人関係

対人関係に関する研究は、「親子関係・家族関係」、「友人関係・異性関係」、「対人認知」、「対人感情」、「対人魅力および自己開示」、「社会的行動・社会的相互作用

」、「その他」、そして「集団力学」に分類された(表5-1~表5-4を参照)。「その他」は、研究題目において「対人認知・対人感情・社会的行動・対人的行動」として分類されていたもののうち、特定のカテゴリーとして独立することができなかったものをすべて含んでいる。

親子関係・家族関係 親子関係と家族関係は表5-1に示される通りである。ここでは、質問紙を中心とした種々の親子関係テストによって親子関係や家族関係が測定されている傾向が伺える。また、この領域では、単に青年の側からみた親に対する認知に留まらず、親の側からの認知を測定しようとする試みが比較的多くなされていることが分かる。発達の側面を重視している領域であることも、対象の選択方法によって伺える。

親子関係において問題にされている構成概念の中心的なものとしては、養育態度・子どもの態度(認知的、感情的、行動的側面を含めて)、同一視(同一化)、モデリングなどが挙げられよう。また、このような親子関係の問題は、青年の人格発達、社会化に与える影響が大きいため、他の構成概念との関連が多く見られている。例えば、表5-1では、学業達成、社会的態度、適応性、性役割、自己評価、職業意識などが示されている。

友人関係・異性関係 友人関係と異性関係についての研究は、表5-2に示される通りである。ここからも分かるように、友人関係と異性関係の問題は、青年心理学における重要なテーマであるにもかかわらず、比較的少数の研究しか行なわれていないのが現状である。

しかし、友人関係に関しては、選択行動、対人認知の問題として、社会心理学的に研究されている傾向があり、それは表5-3-1などで扱われている。

対人認知 対人認知についての研究は、表5-3-1に示される通りである。ここでいう対人認知とは、友人(級友)としての対人認知や、年齢要因を考慮した対人認知の研究である場合と、単に一般的、普遍的な対人認知の法則性の研究とに大別することができるように思われた。

発達の視点を含む研究は、村山(1977)、林(1981)によって示され、また、大橋の一連の研究(大橋, 1956a; 大橋, 1956b; 大橋, 1958)においても級友としての他者であることが若干強調されているように伺われる。しかし、全体としては、社会心理学的な視点からの対人認知の構造、次元性の分析が中心となっている。しかし、他方で相互作用の側面を問題にしているという点で、社

表3 身体性に関する研究

著者	年号	方法	対象	測定された概念
大平 勝馬	1953	質問紙 内田クレベリ ン作業検査 岡部・淡 路両氏情緒性検査 縦 断的研究	中学生・高校生・大学 生・社会人 (いずれも女子)	性徴(月経(月経持続日数, 月経周期, 月経に随伴する障碍症状, 月経の動揺性)の側面から検討), 性格(作業検査からみた動揺性, 情緒的安定性)
大平 勝馬	1955	ロールシャッハ・テスト 手根骨化骨核X線像の 計測	小学生・中学生 (いずれも男女)	身体成熟度(手根骨化骨核X線像から成熟指数を算出), 性格構造(ロールシャッハ・テストの反応から測定: 知能, 想像力, 抽象的思考, 現実的把握能力, 創造性, 観念の豊かさ, 精神活動の硬直性, 思考の幼稚性, 知的適応性, 向 性, 情緒的安定性, 情緒的成熟, 自己中心性など)
大平 勝馬	1956	手根骨化骨核X線像 の計測	0歳から15歳までの男女	身体成熟度(手根骨化骨核X線像から算出された成熟指数, 成歯状態, 初潮年齢, 身長体重の増加, 体質係数より求 めた発育指数)
細井 啓子	1982	質問紙(言語連想法)	大学生(男女)	概念(生理現象・性役割に関する刺激語に対するイメージ, 好悪感情), およびその性差
斉藤 誠一	1985	質問紙	小学生・中学生 (いずれも男女)	身体発育・身体成熟(身長, 体重, 胸囲の計測値, 第二次性徴(男子: 変声, 性毛の発毛, 精通; 女子: 乳房の発 達, 性毛の発毛, 初潮)の発現の有無, 身体満足度(身体計測値, 運動能力, 顔, 容姿の満足度: 自己評価)), 性役 割意識(性役割の4次元, 外面的事実, 個人的行動, 社会的行動, 内面的特性を含む。男性役割期待(望ましい男性 像), 女性役割期待(望ましい女性像), 性役割実現度(自己認知・自己評価))
間宮 武	1986	実験法(性的刺激に 対する反応[GSR, 呼吸運動]の測定)	小学生・中学生 (いずれも男女)	性的発達, 性的発達の臨界期(性的刺激語(性的刺激文章, 性的解剖図, 性的図版)に対する感受動揺度 により測定: 性的刺激に対する感受性, 性意識), 身体成熟(初潮の有無)
清水 栄長	1986	実験法(歩行および 連想の測定)	1歳から84歳までの男女	テンポ(身体的活動[歩行]のテンポ, 精神的活動[連想]のテンポ)
松原 達哉	1986	調査 標準学力検査 教師作成検査等によ る縦断的研究	小学生・中学生 (いずれも男女)	生まれ月(早生まれ・遅生まれ), 身体発育(体位(身長, 体重, 胸囲, 座高)), 学力(国語, 社会, 算数, 理科, 音楽, 図工, 体育の学業成績), 指導性(学級活動およびクラブ活動等の委員の経験の有無)
清水 弘司	1979	質問紙	大学生(男女)	性的発達(性的態度, 性意識, 性行動の側面から), 性的態度(性的感受性, 性的道徳性, 対異性態度), 性意識(異 性との交際において許容できると考えられる性行動の限度), 性行動(それまでに体験した性行動), 依存対象(対象 (母親, 父親, 最も親しいきょうだいの一人, 最も親しい友人の一人, 異性の友人で一番好き那人, 最も尊敬してい る人, 最も尊敬している先生)・様式・強度の3要因) ※価値観も含まれていると考えられる。

表4 性役割に関する研究

著者	年号	方法	対象	測定された概念	性度
野上 芳彦	1956	質問紙 (ターマン性度検査)	中学生・高校生・大学生・社会人の男女・専門高校生(女子)		性度
間宮 武	1959	絵画選択(実験法) 質問紙	幼稚園児・小学生・中学生(いずれも男女)	性役割意識(絵画(遊具・活動・成人の職業)選択および絵画に対する性的帰属から性役割意識の形成を測定:被験者は幼稚園児・小学生), 性差役割意識(能力, 特性(とくに性格), 道徳性の各領域に対し, それが男女いずれに帰属されるかを測定。また, 望ましさも含む) ※性役割認知・評価	性役割意識(絵画(遊具・活動・成人の職業)選択および絵画に対する性的帰属から性役割意識の形成を測定:被験者は幼稚園児・小学生), 性差役割意識(能力, 特性(とくに性格), 道徳性の各領域に対し, それが男女いずれに帰属されるかを測定。また, 望ましさも含む) ※性役割認知・評価
柏木 恵子	1967	質問紙(形容詞対34項目, 7段階評定)	中学生・高校生・大学生(いずれも男女)	性役割認知(項目に示された形容詞の内容が, 男女においてどの程度望ましいと判断するかによって測定) ※期待・望ましさの認知に加え, 評価の側面も含まれていると考えられる。	性役割認知(項目に示された形容詞の内容が, 男女においてどの程度望ましいと判断するかによって測定) ※期待・望ましさの認知に加え, 評価の側面も含まれていると考えられる。
柏木 恵子	1972	柏木(1967)に同じ。	柏木(1967)に同じ。	柏木(1967)に同じ。	柏木(1967)に同じ。
東 俊子 田中 久子 土屋 和子	1973	質問紙	小学生・中学生(いずれも男女)	性役割認知(性役割の4次元[外面的事実, 個人的行動, 社会的行動, 内面的特性]: 認知的側面)	性役割認知(性役割の4次元[外面的事実, 個人的行動, 社会的行動, 内面的特性]: 認知的側面)
柏木 恵子	1974	質問紙	中学生(女子)・高校生(女子)・大学生(男女)	性役割期待(自己の性役割期待, 社会一般の性役割期待), 性役割認知別度 ※性役割認知・評価	性役割期待(自己の性役割期待, 社会一般の性役割期待), 性役割認知別度 ※性役割認知・評価
伊藤 裕子	1980	質問紙	大学生(女子)およびその両親	養育態度(娘からみた児童・青年期における両親の状況, 両親からみた娘に対する養育態度: 娘に対して期待する性役割, 一般的な性役割観を測定するための性役割に関する項目から成っている。), 職経歴(大学卒業後に希望する職経歴。親子共。: 非就業結婚型, 結婚時退職型, 出産時退職型, 結婚後内就業型, 再就職型, 就業継続型)	養育態度(娘からみた児童・青年期における両親の状況, 両親からみた娘に対する養育態度: 娘に対して期待する性役割, 一般的な性役割観を測定するための性役割に関する項目から成っている。), 職経歴(大学卒業後に希望する職経歴。親子共。: 非就業結婚型, 結婚時退職型, 出産時退職型, 結婚後内就業型, 再就職型, 就業継続型)
伊藤 裕子	1981	質問紙(MMPIのMf scaleを含む)	大学生(女子)	性役割観(自己にとっての重要性: Masculinity, Femininity, Humanity), 職経歴(大学卒業後に希望する職経歴) 伊藤(1980)に同じ類型), 女性性の受容(性役割の評価), 性度	性役割観(自己にとっての重要性: Masculinity, Femininity, Humanity), 職経歴(大学卒業後に希望する職経歴) 伊藤(1980)に同じ類型), 女性性の受容(性役割の評価), 性度
細井 啓子	1982	質問紙(言語連想法)	大学生(男女)	概念(生理現象・性役割に関する刺激語に対するイメージ, 好悪感情), およびその性差	概念(生理現象・性役割に関する刺激語に対するイメージ, 好悪感情), およびその性差
伊藤 裕子 秋津 慶子	1983	質問紙	中学生・高校生・大学生・成人(いずれも男女)	性役割観(Masculinity, Femininity, Humanity)のそれぞれについて, 4つの評価次元(個人的評価, 社会的評価, 男性役割期待, 女性役割期待)で回答を求めらる。), 性役割認知別度(男性役割期待-女性役割期待の絶対値)	性役割観(Masculinity, Femininity, Humanity)のそれぞれについて, 4つの評価次元(個人的評価, 社会的評価, 男性役割期待, 女性役割期待)で回答を求めらる。), 性役割認知別度(男性役割期待-女性役割期待の絶対値)
斉藤 誠一	1985	質問紙	小学生・中学生(いずれも男女)	身体発育・身体成熟(体重, 胸囲の計測値, 第二性徴(男子: 変声, 性毛の発毛, 精通; 女子: 乳房の発達, 性毛の発毛, 初潮)の発現の有無, 身体満足度[身体計測値, 運動能力, 顔, 容姿の満足度: 自己評価]), 性役割意識(性役割の4次元, 外面的事実, 個人的行動, 社会的行動, 内面的特性を含む。男性役割期待[望ましい男性像], 女性役割期待[望ましい女性像], 性役割実現度[自己認知・自己評価])	身体発育・身体成熟(体重, 胸囲の計測値, 第二性徴(男子: 変声, 性毛の発毛, 精通; 女子: 乳房の発達, 性毛の発毛, 初潮)の発現の有無, 身体満足度[身体計測値, 運動能力, 顔, 容姿の満足度: 自己評価]), 性役割意識(性役割の4次元, 外面的事実, 個人的行動, 社会的行動, 内面的特性を含む。男性役割期待[望ましい男性像], 女性役割期待[望ましい女性像], 性役割実現度[自己認知・自己評価])
伊藤 裕子	1986	質問紙	大学生(男女)	性役割期待(男性役割期待, 女性役割期待, 個人的評価: 性役割特性語は, 作動性, 共同性, 美・繊細の因子から成る。), 性役割観(Masculinity, Femininity, Humanity)	性役割期待(男性役割期待, 女性役割期待, 個人的評価: 性役割特性語は, 作動性, 共同性, 美・繊細の因子から成る。), 性役割観(Masculinity, Femininity, Humanity)
戸田 和子 堅田 弥生	1987	質問紙(自由記述)	大学生(男女)・専門高校生(女子)	性役割受容(目標収斂特性(挑戦志向・積極補充・楽観人生見とおし・積極補充依存人生・使命回避), 受容動機特性(具体提案・結婚指摘なし・現状積極受容・現状拒否・実存受容・試験的選択), 動機特性(適任感あり・適任感稀薄・社会役割不当感・女性有利・男性性格羨望・女性特性嫌悪なし)), 規範的同一化(母親・父親・母親以外の同性の誰か・父親以外の異性の誰か)	性役割受容(目標収斂特性(挑戦志向・積極補充・楽観人生見とおし・積極補充依存人生・使命回避), 受容動機特性(具体提案・結婚指摘なし・現状積極受容・現状拒否・実存受容・試験的選択), 動機特性(適任感あり・適任感稀薄・社会役割不当感・女性有利・男性性格羨望・女性特性嫌悪なし)), 規範的同一化(母親・父親・母親以外の同性の誰か・父親以外の異性の誰か)
山口 素子	1989	質問紙(7件法)	中学生・高校生・大学生(いずれも男女)	性役割期待(自己期待→理想自己, 他者期待(母, 父親, 社会)→他者認知, 社会認知) ※価値の側面を含んでいる。	性役割期待(自己期待→理想自己, 他者期待(母, 父親, 社会)→他者認知, 社会認知) ※価値の側面を含んでいる。

表5-1 対人関係に関する研究(1)-親子関係・家族関係-

著者	年号	方法	対象	測定された概念
原岡 一馬	1957	家庭環境診断テスト 知能検査(田中B式)	中学生	家庭環境(家庭の一般的状态, 子どものための施設, 文化的状態, 家庭の一般的雰囲気, 両親の教育的関心: 子どもの側からの認知), 学業遂行(アンダーアチーブメント, オバーアチーブメント), 知能
市村 潤	1958	鈴木ベネ式知能検査 ロールシミュレーションテスト	非行少年およびその両親	パーソナリティ(親子間の類似性), 知能(親子間の類似性), 不適応性(非行, 精神病質)
田口 孝之 徳田 安俊	1959	質問紙 (自由記述を含む)	小学生・中学生およびその両親と教師	家庭の雰囲気(子ども・両親の2者からの認知→親の平素の態度[愛情・接触・話し合い], 教育的信念・方針, 実践的な指導[指導・賞罰], 教師の認知→親の教育態度, 経済的ゆとり, 地域での社会的地位・信用度, 子どもの教育に対する関心度, 子どもに対する評価)
依田 新 久世 敏雄	1959	質問紙	中学生・高校生・中高生の両親 (いずれも男女)	社会的態度(民主的-封建的[政治社会問題], 合理的-非合理的[一般社会の風潮], 精神主義的-功利的(経済的問題), 教養主義的-利己的[学校問題]), 親子関係(社会的態度における青年-両親関係の類似性・相違性)
大石 明子	1962	等現問隔法 質問紙	心理学者・16歳から50歳代までの男女(高校生とその両親が含まれる)	親子関係(親子関係に関する規範意識(理想)と実践意識(現実), 親子間での両意識のずれ)
青木 邦子	1966	質問紙	高校生(男女)	親子関係(子どもの認知による親子間の親疎性: 親子の接触様式, 親子関係の善し悪し)
梶田 敏一	1970	面接調査 文章完成法	小学生・中学生(いずれも男女)およびその両親	両親との葛藤状況における子どもの反応(向責方向[自責・他責・無責・第3者責・不明確]・解決様式[反応種別: 自閉的, 表情的・行動的]・解決方向[方向探索・自護方向・他護方向・無護方向・状況離脱方向・依存方向]); 問題の回避, 行為的解決志向反応, 自閉的解決志向反応, 逃避的衝動反応, 攻撃的衝動反応) ※本人, 両親の認知による反応
五十里玉喜 岡田 啓子 小口 秀子 藤田美弥子 藤 永 保	1971	質問紙(SD法, 文章完成法, 絵画・欲求不満テスト形式のものを含む)	小学生・中学生(いずれも男女)およびその母親	権威主義的態度(子どもと母親双方の), 親のしつけ態度(子どもと母親のそれぞれの認知による), 母親へのモデリング(子どもの母親への現実像と理想像とのずれより測定), 親に対する感情・評価
古川 綾子	1974	P.M式親子関係調査	幼稚園児・小学生・中学生・高校生の母親	両親のリーダークラッシュ行動(親の養育態度[情緒的相互作用, しつけ・訓練]に対する子どもとの現実認知と理想像。母親と子どもの認知のずれ) ※母親の質も子どもと同様に自分の実際の母親について尋ねている。
辻岡 美延 山本 吉廣	1978	質問紙	中学生(男女)	親子関係(情緒的支持・同一化・統制・自律性: 子どもの側からみた親の子どもへの態度の認知・評価)

森下 正康	1979	質問紙	大学生(女子)およびその両親	同一視(親子間の価値観(理念主義・享楽主義・利己主義・宗教性)・性格特性(外向性・情緒安定性・強靱性)の類似性)、親和性(父母に対する子どもの親和度) ※父母の価値観・性格特性についての子どもへの認知も含まれている。
森下 正康	1982	質問紙 親子関係診断尺度(EICA)	中学生(男女)およびその両親	対人特性の同一視(親子間の対人特性(おしゃべり・独立性・わがまま・内気・世話ずき)の類似性)、養育態度(子どもの側からみた親の養育態度:受容型,統制型,拒否型,自律型,受容統制型)
柴田 薫	1979	質問紙	小学生・中学生・高校生(いずれも男女)およびその母親	態度(今日の社会・教育問題に対する態度。子ども・母親のそれぞれの態度の自己評定および相手の態度の推定評定:伝統的傾向,リベラル志向性),世代差(子どもと母親の認知の差から推定:実際上の世代差,子どもへの認知上の世代差,母親の認知上の世代差,推定上の世代差)
伊藤 裕子	1980	質問紙	大学生(女子)およびその両親	養育態度(娘からみた児童・青年期における両親の娘の状況,両親からみた娘に対する養育態度:娘に対して期待する性役割,一般的な性役割観を測定するための性役割に関する項目から成っている。),職経歴(大学卒業後に希望する職経歴。親子共。:非就業結婚型,結婚時退職型,出産時退職型,結婚後就業型,再就職型,就業継続型)
宮野 祥雄	1984	Q分類	中学生・教養院生徒(いずれも男女)	親に対する子どもの態度(同調的-対立的[反抗的],社会的-反社会的:価値規範に関する内容について)
小野寺敦子	1984	質問紙 (自由記述を含む)	大学生(女子)	父-娘関係(娘からみた父親の魅力[父親像],父娘間の日常的な接触行動)
戸田 和子 堅田 弥生	1987	質問紙(自由記述)	大学生(男女)・専門学校生(女子)	性役割受容(目標収斂特性(挑戦志向・積極補完・楽観人生見とおし・積極補完依存人生・使命回避),受容動機特性(具体提案・結婚指摘なし・現状積極受容・現況拒否・実存受容・試験的選択),動機特性(適任感あり・適任感稀薄・社会役割不当感・女性有利・男性性格羨望・女性特性嫌悪なし)),規範的同一化(母親・父親・母親以外の同性の誰か・父親以外の異性の誰か)
徳田 完二	1987	質問紙(5件法) 親子関係診断尺度(EICA)	高校生(男女)	自己評価,両親の養育態度(情緒的支持・同一化・統制性・自律性:子どもの側からみた親の子どもへの態度の認知・評価)
小川 一夫 田中 宏二	1979	質問紙 (自由記述を含む)	中学生・高校生(いずれも男女)	職業意識(子どもの認知による父母の期待職業およびそれに対する子どもの態度,子どもの希望職業およびそれに対する父母の態度,子どもの職業的価値観・出生順位,父母の職業),職業継承性。但し,結果に関しては中学生・高校生の男子に関するものに限定されている。
小川 一夫 田中 宏二	1980	質問紙 (自由記述を含む)	中学生・高校生(いずれも女子)	小川・田中(1979)と同じ。但し,結果に関しては中学生・高校生の女子に関するもの(娘の認知による親の職業継承期待と娘の職業継承希望)に限られている。
田中 宏二 小川 一夫	1981	質問紙(SD法, 自由記述を含む)	看護学生・大学生(女子)	職業意識(子どもの認知による父母の期待職業[職業継承期待も],希望職業および動機[大学生のみ],潜在的就職希望および動機・断念理由[看護学生のみ],看護職希求度[看護学生のみ],父母の職業),職業継承性,親同一視,母親の生き方への子の態度,母親の人生観 ※いずれも子どもの側からの認知
田中 宏二 小川 一夫	1982	質問紙(SD法, 自由記述を含む)	大学生(男女)	職業意識(子どもの認知による父母の期待職業[職業継承期待も],希望職業および動機,職業モデル,職業的態度[希求度・展望・志望決定時期等],父母の職業),職業継承性,親同一視,父母の生き方に対する子の態度 ※教師職選択に及ぼす親の影響に関する研究

表5-2 対人関係に関する研究(2)-友人関係・異性関係-

著者	年号	方法	対象	測定された概念
阿部孫四郎	1950	質問紙	小学生・中学生・師範学校生 (いずれも男女)	理想性格(仲間・先生(指導者)についての理想的人格像)
塩田 芳久	1955	ソシオメトリック・テスト ガスフウ・テスト	小学生・中学生 (いずれも男女)	交友関係, 他者評価(友人間の相互評価), 評価能力の発達
三木 安正 久原 恵子 波多野 誼余夫 高橋 恵子	1969	質問紙 (SD法を含む)	中学生・高校生 (いずれも男女, 双生児を含む)	友人関係(親密さの認知: 情緒面・課題志向面; 友人に対する対人認知: 社会的活動性, 魅力性, 道徳性; 友人関係における質的側面: 友人関係の構造, 親友の機能分化, 友人関係の持続への関心, 理想の友人), 兄弟関係(親密さ, 情緒面・課題志向面) ※双生児と一般児との比較研究
磯崎三喜年 高橋 超	1988	質問紙	小学生・中学生 (いずれも男女)	self-esteem(自己評価), 教科への関与度, 学業成績, 友人選択(心理的近さの認知), 自己評価維持機制(教科関与度の違い毎にみた自他の学業成績評定および実際の学業成績の差異から判定)
加藤 隆勝 返田 健	1961	Q分類	大学生(男女)	自己像(現実自己・理想自己: 自己認知・自己評価), 理想的異性像, 自己像・異性像の差異 ※いずれも知能, 一般的教養, 健康, 情緒気質, 社会性, 道徳性の各側面について測定
戸田 弘二 松井 豊	1985	質問紙	大学生(男女)	愛着(母親・同性の親友・恋人の3対象への愛着: 心の支え因子, 助力欲求因子, 関心欲求因子, 受容欲求因子), 恋愛感情, 恋愛行動(性行動を含む)

表5-3-1 対人関係に関する研究(3)-対人認知-

著者	年号	方法	対象	測定された概念
大橋 正夫	1956a	質問紙(ニア・ソジオメトリック・テスト, 人気・好意度知覚テスト)	小学生・中学生(いずれも男女)	選択行動, 対人認知(級友に対する好き嫌い, 級友の学級内における人気の知覚, 級友の自分に対する好意の程度の知覚→態度の一貫性, 要求の知覚への反映, 成員の集団基準への適合)
大橋 正夫	1956b	質問紙(ニア・ソジオメトリック・テスト, ベア-関係知覚テスト)	小学生・中学生(いずれも男女)	選択行動, 対人認知(級友に対する好き嫌い, 仲良しベア-仲悪ベア-の知覚, 関係知覚)
大橋 正夫	1958	質問紙(ニア・ソジオメトリック・テスト, 関係知覚テスト, 縦断的に測定)	中学生(男女)	選択行動, 対人認知(級友に対する好き嫌い), 学級構造化(学級構造化の時間的進行)
藤原 哲	1963	質問紙	高校生(男女)	対人的認知構造, 対人的態度の認知的交互作用過程 (congruency・incongruency), 選択行動, 対人感情(好悪感情); 他者に対する対人感情, 他者から自己に寄せられていると知覚された対人感情, 社会勢力(集団成員間における社会的地位)
藤原 哲	1965	質問紙	高校生(男女)	対人的認知構造, 選択行動, 対人感情(好悪感情); 他者に対する対人感情, 他者から自己に寄せられていると知覚された対人感情, 社会勢力(集団成員間における社会的地位), 社会的共感性
藤原 哲	1977	質問紙 (Role Construct Rep Test に準拠したテスト: 縦断的に測定)	大学生(男女)	対人的認知構造, 個人的構成概念 (personal constructs の体系, 構成概念関係強度の安定性・変動性)
上田 吉一	1964	クレベリン内田精神作業検査 質問紙	中学生(男女)	人格の健康性(クレベリン内田精神作業検査によって測定), 能力認知(自己および他者: 数学の試験の予想点と実際の点数との差異によって認知の正確さを判定)
曾野佐紀子	1971	質問紙 文章完成法	大学生(男女)	他者認知(他者のパーソナリティ特性の把握・判断: 文章完成法事例を刺激として), パーソナリティ
中里 浩明 Michael H. Bond 白石 大介	1976	質問紙 (実験法)	大学生(男女)	人格認知の次元性 (Norman 尺度→外向性(社交性), 温厚性, 良心性(責任性), 情緒安定性(強靱性), 文化(的洗練性), Self-Differential 尺度→強靱性(意欲性), 獨善性, 外向性)
蘭 千壽	1977	ソシオメトリック・テスト 行動観察 (実験法) 心拍数測定 (実験法)	大学生(女子)	対人相互作用 (均衡要因・一致性要因, 認知者の緊張生起・緊張低減の力動性)
村山久美子	1977	質問紙(自由記述)	小学生・中学生(いずれも男女)	対人認知(自己および好きな人・あまり好きでない人に関して自由に記述させ、その内容分析を行なう。分類単位→中心的対周辺的, 特性語, 意味の限定, 構成する表現) ※対人認知の発達
林 文俊	1979	質問紙 YG性格検査	中学生	対人認知構造, 認知的複雑性, self-esteem, 性格等
林 文俊	1981	質問紙	中学生・大学生(いずれも男女)	対人認知構造, 対人認知の発達, 認知的複雑性 ※対人認知構造における個人差を年齢と性の要因によって分析。
今井 芳昭	1982	質問紙 (実験法)	大学生(男子)	勢力保持者・勢力行使, 勢力保持者の自己評価・他者(作業員)評価・統御の所在の認知(指示・命令, 報酬欲, 向上心), 対人関係認知(心理的距離) ※勢力保持者における認知過程の測定
古川 雅文 藤原 武弘 井上 弥 石井 眞治 福田 廣	1983	質問紙 心理的距離地図 (縦断的研究)	大学生(男女)	対人関係 (心理的距離の認知およびその時間的変化), 環境移行 (およびそれに対する適応)
井上 弥 藤原 武弘 石井 眞治 村本 朋子	1984	実験法 (顔面表情写真)	小学生・大学生(いずれも男女)	非言語的コミュニケーション (顔面表情の表出能力・認知能力(非言語的なレベルでの感情の表出能力と認知能力)), 感情(喜び, 驚き, 恐れ, 悲しみ, 怒り, 嫌悪)
吉田 寿夫	1984	質問紙(実験法)	大学生(男女)	対人認知(対人認知における次元ウェイトの様相(清潔さ・理知性・温厚性・自己信頼性・明朗性), 権威主義パーソナリティ)

表 5-3-2 対人関係に関する研究(4)-対人感情-

著者	年号	方法	対象	測定された構成概念
岩下 豊彦	1961	質問紙 (実験法)	大学生 (男女)・ 高校生 (女子)	対人知覚(過程), 対人感情, ※自己認知, 自己評価, および理想自己の側面も含まれている。
岩下 豊彦	1963	質問紙 (実験法)	大学生 (男女)・ 高校生 (女子)	岩下 (1961) に同じ
岩下 豊彦	1964	質問紙 (実験法)	高校生 (女子)	岩下 (1961) に同じ
岩下 豊彦	1968	質問紙 (実験法)	大学生 (男女)・ 高校生 (女子)	対人知覚 (過程), 対人感情, 社会的適心性 (好ましさ・好ましくなさ)
梶田 毅一	1967b	Self-Differential 法	中学生 (男子)	自己概念(現実自己・理想自己), 他者概念(特定の他者についての概念, および推定されたその他者の自己概念), 他者の実際の自己概念, 対人感情 (好悪)
川岸 弘枝	1972	SD 法 YG 性格検査 Self-Differential 法 (実験法)	大学生・大学院生 (いずれも男女)	自己受容 (社会的受容, 個人的受容, 満足度, 理想自己と現実自己の差異: 自己認知・自己評価), 他者受容, 適応性 (YG 性格検査による測定)
工藤 力	1972	質問紙	小学生・中学生・ 大学生	認知的選り好み (の認知), 対人感情 (生徒の教師に対する対人感情 [好嫌感情], 級友に対する対人感情), 教師からの好嫌感情の自己認知
中里 浩明 田中 国夫	1973	Behavioral- Differentialia 法	大学生 (男女)	対人態度 (対人態度の感情構造 [激励・親しみ-疎遠・怨念の因子, 甘えと依存の因子, 優劣-劣等感の因子, 憐憫-妬みの因子], 対象刺激人物の構造 [心理的負債の対象の因子, 心理的攻撃の対象の因子, 羨望・劣等感の対象の因子, 心理的依存の因子])
蘭 千 壽	1982	質問紙 ソシオメト リック・テスト (実験法)	大学生	他者評価 (受容条件・拒否条件: 実験的に操作された独立変数), パフォーマンス評価 (自他のパズル作品に対する評価), 対人的好悪感情 (対人認知), 社会的相互作用
齊藤 勇	1985	質問紙	大学生 (男女)	対人感情 (好意, 慈愛, 優越, 軽蔑, 嫌悪, 恐怖, 劣等, 尊敬, 特別の感情なし), 対人行動 (友好的行動, 依存的行動, 服従的行動, 回避的行動, 拒否的行動, 攻撃的行動, 支配的行動, 援助的行動, 相手の成功・失敗), 情緒 ※対人行動の相手の性も考慮。
齊藤 勇	1986	齊藤 (1985) に同じ	齊藤 (1985) に同じ	齊藤 (1985) に同じ
八木 保樹 新 延 明	1989	質問紙 (実験法)	大学生 (男子)	self-esteem, 社会的望ましさ, セルフ・モニタリング, 対人感情 (特に嫉妬)・評価, 課題選択

表5-3-3 対人関係に関する研究(5)-対人魅力および自己開示-

著者	年号	方法	対象	測定された概念
梶田 敏一	1967a	質問紙・作文 (実験法)	高校生(男子)	自己評価(自己および自己のパフォーマンスに対する評価)、他者からの評価(実験的に操作された独立変数)、他者からの評価の認知、対人魅力、およびこれらの関連から認知過程を検討
中里 浩明 井上 徹 田中 国夫	1975	質問紙(実験法)	大学生(男女)	対人判断(人格、興味・関心、価値観、意見)、対人魅力(好意度)、人格類似性(向性〔外向型・内向型〕および欲求〔養護型・求護型〕)における類似性。但し、欲求に関しては相補性も検討。
中里 浩明	1977	質問紙(実験法)	大学生(男子)	対人魅力(遊び仲間・仕事仲間、好感・尊敬；魅力形成における判断次元として)、人格特性次元(社会的次元・知的次元；魅力形成における刺激次元として)
相川 充 大城トモ子 横川 和章	1983	質問紙(実験法)	大学生(女子)	自己開示(内密度・限定性；実験者の自己開示)、自己認知(対人場面で相手が自分をどのようにに認知していると感じるか)、対人魅力(対人印象も含む)、返報性
中村 雅彦	1984	質問紙(実験法)	大学生(男子)	自己開示(内面性・帰属；実験者の自己開示；内面性・時間；被験者の自己開示、行動評定による)、対人魅力(対人印象も含む)
中村 雅彦	1986	質問紙(実験法)	大学生(女子)	自己開示(内面性・望ましさ；実験者の自己開示；帰属；被験者による実験者の開示の動機に関する帰属)、対人魅力
榎本 博明	1987	質問紙	大学生(男女)	自己開示(開示の側面〔精神的自己・身体的自己・社会的自己・物質的自己・血縁的自己・実存的自己〕、開示の相手〔父・母・最も親しい同性の友人・最も親しい異性の友人〕)
遠藤 公久	1989	質問紙(3・4・5・6・7件法)	大学生(男女)	自己開示(開示状況・開示意图)、孤独感、神経症的傾向、自意識(公的・私的)、self-esteem、向性、セルフ・モニタリング ※自己認知、自己評価の側面を測定。
小口 孝司	1989	質問紙	大学生(男女)	自己開示(自己開示量、自己開示動機〔意図性・規範性・感情性〕)、パーソナリティ判断およびその一致度(開示者・被開示者による質問紙評定から測定)
飛田 操	1989	質問紙(実験法)	大学生(女子)	対人魅力(道具的魅力、情緒的魅力)、目標達成困難度、パートナー能力類似性

表 5-3-4 対人関係に関する研究(6)一社会的行動・社会的相互作用一

著者	年号	方法	対象	測定された概念
水原 泰介	1952	質問紙 (実験法)	大学生 (女子)	集団決定 (における意見変化), 協同的・競争的態度 (集団討論における態度)
斎藤 勇 井上 隆二	1971	質問紙 (実験法)	専門学校生 (女子)	自己評価, 対人行動(協同的行動・競争的行動)
長戸 啓子	1973	質問紙・ニアソシオメトリックテスト (実験法)	中学生 (男女)	実験的に操作された変数→自己評価, 協同・競争事態, コミットメント 従属変数→他者に対する態度(対人的態度), 他者の能力の評価 ※認知過程の検討
松井 豊	1981	質問紙	大学生 (男女)	援助行動の経験 (援助行動を援助に伴う損失の大きさ, 被援助者の種類, 援助に必要とされる資源の3点から分類), 内的統御性, 共感性 (感情の被影響性, 感情の暖かさ), 援助規範意識 (一般的援助規範, 恩の規範, 不干渉の規範), 信仰
大里 栄子	1983	質問紙 (実験法)	大学生 (女子)	協同・競争事態 (三者 [二者+一者] 集団での課題解決場面における状況→実験的に操作), 不安 (特性不安・状態不安), 言語指示 (協同・競争) に対する認知, 他者意識, 緊張感・鼓動感, 認知された課題の難易度, 認知された実験の面白さ, 心理学的時間, 心拍数 ※集団過程に関する研究
竹村 和久 高木 修	1987	質問紙 (実験法) 情報モニタリング法)	大学生 (男女)	向社会的行動 (提供行動), 意志決定過程における認知変化 (行動属性の重要性認知の変化)・情報探索ストラテジー ※認知過程
横塚 恰子	1989	質問紙	中学生・高校生 (いずれも男女)	向社会的行動, 対人的価値 (支持的・同調的・承認的・独立的・博愛的・指導的), 情動的共感性 (感情的暖かさ・感情的冷淡さ・感情的被影響性), 障害者への共感性, 自意識 (公的自意識・私的自意識), セルフ・モニタリング, 社会的スキル
佐藤 功	1970	質問紙 (実験法)	大学生 (男女)	cognitive tuning (メッセージ取得者の役割期待による認知構造への影響), 役割期待 (transmission, reception), 認知構造・認知的体制化 (形態的構造化, 内容的構造化: 大学立法化についてのイメージ)
高田知恵子 高田 利武	1976	質問紙 (実験法)	専門学校生・大学生 (いずれも男女)	社会的比較過程 (情報的比較・規範的比較: 能力 [成績] の自己評価に及ぼすモデルの影響から検討)
山岸 明子 無藤 隆	1979	質問紙 語彙テスト	高校生・大学生	道徳判断 (発達), 社会的相互作用 (役割取得およびその機会: 具体的直接的な他者との交流, 所属する集団の活動への参加, 自発的な集団的社会的活動への参加・間接的な関与, マスコミとの接触, 書物との接触。それぞれに対して, 接触度・接触の内容・接触の深さを検討) ※認知された社会的相互作用
吉田富士雄 大本 進	1985	質問紙 (実験法) 人のジレンマゲーム)	大学生 (女子)	社会的相互作用 (ゲーム [囚人のジレンマ] 行動場面における個人間, 集団間相互作用), 対人 (集団) 認知 (相手の行動・意図・性格), 自己認知 (自分の行動・意図・性格) 等
下斗米 淳	1988	質問紙 向性検査 (実験法)	大学生 (男女)	自己概念変容 (向性, 情緒安定性, 強靱性, 誠実性, 過敏性, 過敏性, 理性性), 社会的フィードバック情報(整合条件・不整合条件), 向性 ※社会的相互作用過程, 認知過程

表5-3-5 対人関係に関する研究(7) - その他 -

著者	年号	方法	対象	測定された概念	構成概念
湖上 克義	1984	質問紙	高校生(男女)	大学進学志望動機(大学の本来的機能, 家族への配慮と規範機能, モラトリアム機能, 大学の副次的機能, 大学の経済的機能), 特定大学選択動機(志望大学の経済的・地理的要因, 自己実現への適合, 入学の可能性), 大学イメージ, 人的影響源(一連の動機が主として誰の影響を受けているか。先生・両親・兄弟姉妹・伯父母・友人・祖父母・従兄・友人の親・兄弟・学校の先輩等)	
湖上 克義	1986	面接調査 質問紙	高校生(男女)	人的影響源(進学志望動機に影響を受けた対象〔学校の先生・父親・母親・友人〕および会話内容)	
湖上 克義	1987	質問紙(実験法)	大学生(男子)	勢力構造, 勢力保持者(勢力保持者による勢力行使, 自己およびサブリーダー・部下に対する認知・評価, 帰属, 勢力維持傾向), 地位流動状況	
湖上 克義	1989	質問紙(実験法)	大学生(男子)	測上(1987)に同じ	
阿部孫四郎	1950	質問紙	小学生・中学生・師範学校生(いずれも男女)	理想性格(仲間・先生(指導者)についての理想的人格像)	
菅 佐和子	1975	SD法 ソンオメトリック・テスト	小学生・中学生・高校生(いずれも男女)	self-esteem(現実自己, 理想自己, およびその差異: 自己評価), 対他者関係(友人関係の良好さ)	
渋谷 昌三	1976	質問紙(実験法)	大学生	社会空間(身体方向, 2者間の距離, 社会空間の未知・既知, 包摂のされかた), 対人関係(親しさ, 会話の深刻さ)	
井上 和子 広沢 俊宗 田中 國男	1984	質問紙	中学生・高校生(いずれも男女)	行動の予測因(対象行動〔テレビ・ラジオ・手伝い・映画・免許〕, 行動に対する態度, 主観的規範〔父・母・先生・友達〕の規範信念), 行動意図, 行動の個人的重要度, 行動の過去の経験)	
崔 光 善	1985	質問紙(SD法, 12対の15段階評定尺度)(実験法)	日韓高校生(女子)	現実自己・理想自己(自己認知・自己評価), 親友像, 現実自己と理想自己の差異, 教師からの評価(実験的に操作された独立変数)等 ※日韓の比較文化研究	
戸田 弘二 松井 豊	1985	質問紙	大学生(男女)	愛着(母親・同性の親友・恋人の3対象への愛着: 心の支え因子, 助力欲求因子, 関心欲求因子, 受容欲求因子), 恋愛感情, 恋愛行動(性行動を含む)	
中村 薫	1986	質問紙(4・5件法)	大学生(男子)	孤独感(自己認知), 原因帰属(自己の孤独に対する原因帰属および他者の孤独に対する原因帰属: 努力の欠如, 排他的環境, 性格の悪さ, 機会の欠如)	
戸田 和子 堅田 敬生	1987	質問紙(自由記述)	大学生(男女)・専門学校生(女子)	性役割受容(目標取捨特性〔挑戦志向・積極補完・樂觀人生見とおし・積極補完依存人生・使命回避〕, 受容動機特性〔具体提案・結婚指摘なし・現状積極受容・現況拒否・実存受容・試験的選択〕, 動機特性〔適任感あり・適任感稀薄・社会役割不当感・女性有利・男性性格羨望・女性性格嫌悪なし〕), 規範的同一化(母親・父親・母親以外の同性的誰か・父親以外の異性的誰か)	
山根 一郎	1987	質問紙	大学生(男女)	心理的距離(能動的距離〔能動表象〕・受動的距離〔受動表象]), 面識度	
高橋 裕行	1988	半構造化面接・評定 質問紙	大学生(男女)	自我同一性地位(職業, 価値観, 性役割: 半構造化面接と評定により測定), 親密性地位 自我同一性(質問紙により測定。自己認知, 自己評価の側面)	
楠見 幸子	1989	質問紙(ソシオメトリック・テスト, 自由記述を含む: 縦断的研究)	中学生(男女)	友人選択(選択行動, 選択パターンおよびその時間的変化), 二者間の類似性・相互理解およびその時間的変化(類似性, 相手の心理的特性的理解, 相手から見られた自己像の理解, 仮定された類似性, 自分にはない相手特有の心理的特性的理解), 二者関係の自己評価	
山口 素子	1989	質問紙(7件法)	中学生・高校生・大学生(いずれも男女)	性役割期待(自己期待→理想自己, 他者期待〔母親, 父親, 社会〕→他者認知, 社会の認知) ※価値の側面を含んでいる。	

表5-4 対人関係に関する研究(8)—集団力学—

著者	年号	方法	対象	測定された概念
廣田君美	1953	実験法	中学生(男子)	集団構造(および集団構造の変化), 集団過程(集団内での課題解決, コミュニケーション頻度の変化)
関計夫 三隅不二 岡村二郎	1954	質問紙(ソシオメトリック・テストなど)	大学生	グループ・ダイナミックス(個人の一般運動基礎能力, 劣等感, チームの人間関係・雰囲気, 合宿訓練の効果, 野球に対する態度, 野球活動と学業の葛藤など)
北脇雅男	1955	質問紙(実験法)	中学生・高校生・大学生・成人・職業補導所生(いずれも男女)・洋裁学校生(女子)	態度(職業に対する態度), 技能, 学力, 就職意識, 集団間における職業態度の差異
新田健一	1955	ソシオメトリック・テスト 知能検査 各種性格診断検査 行動観察(事例研究)	非行少年(男子)	特殊閉鎖集団(少年院集団), Socio-types(平均的順応者, リーダー, 嫌われ者, ボス, 孤独者, スケープゴート, 無視されている者), 知能, 性格等
田中熊次郎	1955	ソシオメトリック・テスト(縦断的研究)	小学生・中学生	社会的共感性(2種類のソシオメトリック・テスト(自己を主体として, 他人を選択・排斥する形式, 自己を客体として, 他人からの選択・排斥を想定させる形式)により測定)およびその発達・変容
大橋正夫	1958	質問紙(ニア・ソシオメトリック・テスト, 関係知覚テスト: 縦断的に測定)	中学生(男女)	選択行動, 対人認知(好悪について), 学級構造化(学級構造化の時間的進行)
木下稔子	1964	ソシオメトリック・テスト 実験法	高校生(男子)	同調行動(意見に対する賛成・反対), 集団の凝集性, 課題の重要性(個人の価値体系における重要性)
安藤延男	1966	質問紙(チェックリスト)	中学生・高校生(いずれも女子, 縦断的研究)	準拠集団(学校(当局)・父母・親友・学級・教師・教会の自己にとつての重要性, 個人に対する集団の規範機能), 準拠集団の推移(父母・家族集団残留型パターン, 親友・同輩集団志向型パターン)
星野喜久三	1970	質問紙(SD法)	高校生・大学生(いずれも男女)・非行少年(男女, 平均18歳)	対象感情(美的感情: 美的快因子, 力量・緊張因子, 無力・弛緩因子), 対象感情語の意味特性・意味判断, 非行
斎藤勇 児玉昌久 潮田武彦	1972	実験法(囚人のジレンマゲーム)	中学生	協同・競争行動(囚人のジレンマゲームにおける協同・競争行動), 対人関係(内集団関係・外集団関係・個人間関係)
斎藤勇	1973	P F スタディ	大学生(男女)	攻撃性(攻撃行動の生起と抑制: 認知的なレベルでの), 対人関係(集団外関係・集団内社会的地位関係(上→下, 下→上))
藤原正光	1976	質問紙 実験法(線分判断刺激)	小学生・中学生・高校生(いずれも男女)	同調性(発達の变化), 集団圧力(模倣集団(仲間・教師・母親)からの圧力), 認知様式(集団の標準と自己の判断とのずれの認知様式)
永田良昭	1980	ニア・ソシオメトリック・テスト(実験法)	中学生(男子)	集団規範への同調・逸脱, 集団における地位, 集団過程(課題環境への適応, 対人関係の問題への適応)
古田富士雄 大本進	1985	質問紙(実験法 囚人のジレンマゲーム)	大学生(女子)	社会的相互作用(ゲーム(囚人のジレンマ)行動場面における個人間, 集団間相互作用), 対人(集団)認知(相手の行動・意図・性格), 自己認知(自分の行動・意図・性格)等
竹村和久 高木修	1988	質問紙	中学生(男女)	同調傾向性, 同調行動からの逸脱者に対する態度(状況の性質(向社会的行動場面・反社会的行動場面)×物語の主人公の非同調行動の型(行爲的・無爲的)×教師関連の有無)の3要因により同調行動からの逸脱を記述), いじめ(いじめ集団における役割: 被害者, 加害者, 観衆, 傍観者, 仲裁者, 無関係者)
吉田富士雄 堀洋道	1989	実験法(停止距離法)	大学生(女子)	パーソナルスペース(視線遮断および仲間集団の存在がパーソナルスペースに与える影響を検討)

会心理学的な研究を重視する必要がある。

対人感情 対人感情についての研究は、表5-3-2に示されるとおりである。ここでは、対人認知における感情的側面に焦点が置かれ、とりわけその構造、内容分析などが中心になっていると思われた。また、対象刺激人物の構造の分析(工藤, 1972; 中里・田中, 1973)なども行なわれている。

ここでは、比較的実験的方法が採用されることが多く、対人認知過程の中での感情の問題を扱っているのが特徴であろう。しかし、その反面では、発達の視点が欠けている傾向が伺われた。

対人魅力および自己開示 対人魅力と自己開示の研究における関連性については、既に自己の領域において述べた通りである。この領域における研究(表5-3-3)は、主として、自己開示における種々の要因性の操作と、対人魅力における判断次元の操作とが中心となっている傾向が伺われた。また、開示の対象や開示の側面、人格特性なども問題にされている。

社会的行動・社会的相互作用 社会的行動と社会的相互作用についての研究は、表5-3-4に示される通りである。社会的行動は、表の上半分、社会的相互作用は表の下半分に示されている。

社会的行動に関しては、協同・競争行動、援助行動、向社会的行動が主な構成概念として挙げられる。実験的方法による研究では、認知過程や行動が直接的に扱われている。

社会的相互作用に関する研究では、やはり同様に実験的方法によって、社会的相互作用と、そこでの認知過程が研究されている。

これらの領域においては、認知過程を直接的に検討するという利点の反面、発達の視点が失われている傾向が伺える。その点で、山岸・無藤(1979)の研究は、道徳判断が、社会的相互作用によってどのように発達するかという、社会的相互作用の発達に及ぼす影響を考慮している点で貴重な研究であると思われた。しかし、方法論的には、社会的相互作用、社会的経験を質問紙によって測定している点で、実験的方法による研究とは別の側面を扱っている。

その他 表5-3-5では、対人関係に関する多くのテーマが含まれている。ここでは、青年心理研究上、重要であると考えられる概念について眺めることにする。但し、他の領域と重複し、既に扱ってきた研究については省く

ことにする。

測上(1984, 1986)は、大学志望動機が、どのような人的影響源と関連しているかを検討している。この人的影響源という概念は、青年の様々な発達に影響を及ぼすものと考えられ、その点で重視する必要がある。また、戸田・松井(1985)における愛着・恋愛感情・恋愛行動の概念、戸田・堅田(1987)における性役割受容・規範的同一化の概念、楠見(1989)における友人選択・類似性・相互理解の概念などは、青年理解の上で重要な概念であると考えられ、今後も一層展開される必要がある。

集団力学 集団力学に関連した研究は、表5-4に示される通りである。この領域では、集団の構造や集団内での対人認知、対人関係過程の研究が中心となっている。例えば、同調性の概念は、木下(1964)、藤原(1976)、永田(1980)、そして竹村・高木(1988)など多くの研究者によって取り上げられている。安藤(1966)は、青年の重視する準拠集団がどのように機能し、そして発達的に変化するかを検討している。この準拠集団という概念は、青年の社会化を理解する上で欠かすことのできないものであろう。一般的な集団力学の法則性だけでなく、その集団が青年にとってどのような意味を持つかが問われる必要がある。北脇(1955)は、集団間にどのような職業態度の差異が認められるかを検討している。これも準拠集団の特性という側面を扱っているものと理解できる。

いずれにせよ、集団力学に関する研究では、力動的な観点、および認知過程、社会的相互作用の重視などの点で、注目する必要がある。

⑤依存と独立

依存と独立に関する研究は、表6に示される通りである。この領域における研究は、他の領域と比較しても少ない傾向にあることが伺われる。ここでは、高橋の一連の研究が中心となっている。ここでは、特に依存の構造とその類型が問題にされている。そして、その中では依存の様式、対象の分化度・数・種類、依存要求の強度、依存対象の役割の分化(機能的意味と価値)などに焦点が当てられている。これらの問題は、ほとんど質問紙によって測定されており、また、発達の变化は十分に考慮されている傾向にある。

他方、独立に関しては、唯一、加藤・高木(1980b)においてのみ示されているが、独立性に関連したいくつかの内容に関する自己の認知と評価によって測定されている。ここでも発達の視点が含まれている。

このように、依存と独立は、主として社会性の発達の

表6 依存と独立に関する研究

著者	年号	方法	対象	測定された概念
高橋 恵子	1968a	質問紙 (文章完成法形式の質問を含む)	大学生 (女子)	依存構造・依存構造類型 (依存の様式、対象 (分化度・数・種類)、依存要求の強度)、依存対象の役割分化 (依存対象が個人の存在を支える機能的意味・価値)、両親との親密度。
高橋 恵子	1968b	高橋 (1968a) に同じ。	高校生 (女子)	高橋 (1968a) に同じ。
高橋 恵子	1970	高橋 (1968a) に同じ。	中学生 (女子)	高橋 (1968a) に同じ。
高橋 恵子	1973	高橋 (1968a) に同じ。 (但し縦断的研究を含む)	中学生・高校生 (女子、 双生児を含む)	高橋 (1968a) に同じ。 ※女子双生児における依存構造と一般青年におけるそれとの比較。
高橋 恵子	1974	高橋 (1968a) に同じ。 但し自由記述の生活史を含む。縦断的研究。))	大学生 (女子)	高橋 (1968a) に同じ。依存性発達 (誕生期・幼児期・小学生期・中学生期・高校生期・大学入学から現在までの6時期における発達一般、社会的行動、対人関係に関する生活史の記述をもとに、過去から現在までにおける依存の発達の道筋、及び発達の変容の規定要因を検討。)
清水 弘司	1979	質問紙	大学生 (男女)	性的発達 (性的態度、性意識、性行動の側面から)、性的態度 (性的感受性、性的道徳性、対異性態度)、性意識 (異性との交際において許容できると考えられる性行動の限度)、性行動 (それまでに体験した性行動)、依存対象 (対象 (母親、父親、最も親しいきょうだいの一人、最も親しい友人の一人、異性の友人で一番好きの人、最も尊敬している人、最も尊敬している先生)・様式・強度の3要因) ※価値観も含まれていると考えられる。
加藤 隆勝 高木 秀明	1980b	質問紙 (5件法)	中学生・高校生・大学生 (いずれも男女)	独立意識 (独立性、親への依存性、反抗・内的混乱: 自己認知・自己評価)、自己概念 (反社会性、意欲性・活動性、きちょうめんさ・清潔さ、明朗性・友好性、情緒性、誠実さ: 自己認知・自己評価)
松本 芳之	1987	質問紙 (実験法)	大学生 (男女)	社会的相互作用 (相互依存関係、状況の手がかり、暗黙の調整)

表7-1 生活感情・情緒に関する研究(1) - 孤独感・疎外感, 充実感 -

著者	年号	方法	対象	測定された概念
落合 良行	1974	質問紙 (SCT形式) Q分類	高校生 (男女)	孤独感 (孤独感の類型: 個別性の気づき, および人間同士の理解・共感についての考え方から4類型を見いだす。)
宮下 一博 小林 利宣	1981	質問紙 ペンダー・ゲシュ タルト・テスト	中学生・高校生・大学 生 (いずれも男女)	疎外感 (孤独感・自己嫌悪感・空虚感・圧迫拘束感), 認知・情報処理機能, 自我同一性 (質問紙による測定), 自己 概念 (理想自己と現実自己との差異), 適応 (問題行動の有無)
落合 良行	1982	手記 質問紙 (SCT形式)	小学生・中学生・大学 生・専門学校生・成人 (老人も含む) (いずれも男女)	孤独感 (規定因からみたら孤独感の内包的構造: 心理的条件 [対他的次元・対自的次元・対時的展望次元], 物理的条 件 [物理的孤立状態に関する次元])
落合 良行	1983	質問紙 (複数の孤独 感尺度及びYG検査 を含む)	大学生 (男女)	孤独感 (落合 (1974) における孤独感の類型および他の尺度における孤独感 (親密さ・理解者の存在意識・疎外意識 ・社交性)), 外向性 (思考的外向性・社会的外向性)
落合 良行	1985	質問紙 (自由記述を含む)	中学生・高校生・大学 生 (いずれも男女)	生活感情 (不安感, あせり, 劣等感, 孤独感, 無気力感, いらだたしさ, 疲労感, ゆううつ感, 恐怖感, 空虚感, 疎 外感, あきらめ, 倦怠感, 自己嫌悪感, 嫉妬)
諸井 克英	1985	質問紙 (4件法)	高校生 (男女)	孤独感 (自己認知), self-esteem (自己評価), 自己意識 (公的自意識, 私的自意識, 社会的不安), self-monitoring ※いずれも自己認知・自己評価の側面を測定していると考えられる。
中村 薫	1986	質問紙 (4・5件法)	大学生 (男子)	孤独感 (自己認知), 原因帰属 (自己の孤独に対する原因帰属および他者の孤独に対する原因帰属: 努力の欠如, 排 他的環境, 性格の悪さ, 機会の欠如)
工藤 力	1986	質問紙 (自由記述を含む)	中学生 (男女)	孤独感, 孤独感の直接的出来事 (孤独感状況: 理由なきさびしさ, [家庭内] いさかい, 親しい人との死別, 友達と の別離, 叱責, 突き放され, 親への不信, 友達からの圧迫), 孤独感への対処行動 (身近な気晴らし, 違法行動, 暴力, 非行行動, 音楽的活動, 諦観, 反抗行動, 対人接触, 無為, 忍耐, 彷徨, 娯乐的活動)
大野 久	1984	質問紙	大学生 (男女)	充実感 (一般的充実感気分, 自信, 連帯感, 希望・目標, 空虚感, 退屈感, 焦燥感, 無力感, 自己嫌悪 感, 孤独感, 妥協的諦念, 自立, 甘え) ※充実感を青年の健康な自我同一性の実感としてとらえている。

表7-2 生活感情・情緒に関する研究(2) - 情緒その他 -

著者	年号	方法	対象	測定された概念
橋 寿郎	1957	質問紙 (実験法)	小学生・中学生・高校生・大学生 (いずれも男女)	情緒 (羞恥感: 現実的羞恥感における内省と行動, 予料的羞恥感における行動) ※情緒研究方法としての実験法と質問紙法の比較検討。
星野喜久三	1958	質問紙 (SCT形式)	中学生・高校生・大学生 (いずれも男女)	美的情操 (価値感情の一領域と規定。自然界や芸術作品に接して美的価値を対象として発生する複合的感情。表現量, 表現の適切さ, 表現における否定的感情について検討) ※認知的発達側の側面
松岡 武	1960	色彩象徴法 言語連想法	小学生・中学生・高校生 (いずれも男女)	感情 (意識的側面。感情語の理解度, 意識内容の質的変容から感情の発達分化の様相を検討。) ※認知的発達側の側面
神作 順子	1963	質問紙 (SD法, 色彩カードを刺激とした実験法)	大学生・成人 (いずれも男女)	色彩感情 (色彩感情を支配する因子, 色彩感情の調和 - 不調和, 色差 (色相差, 明度差, 彩度差) の色彩感情に及ぼす影響)
大山 正 田中 靖政 芳賀 純	1963	質問紙 (SD法, 色彩カードと色彩象徴語を刺激とした実験法)	日本人: 大学生男女 アメリカ人: 高校生・大学生の女子	色彩感情 (Activity, Potency, Evaluation の3尺度から構成。色相・明度・彩度の効果, 象徴語との関係について日米学生の比較文化的研究)
星野喜久三	1969	実験法 (表情図)	幼稚園児・小学生・中学生・大学生 (いずれも男女)	表情 (情緒表出水準, 活動表出水準, 非表出あるいは matter-of-fact 水準), 表情知覚, 表情理解, 表情識別力, 表情嗜好 ※感情の知覚と理解における発達
星野喜久三	1970	質問紙 (SD法)	高校生・大学生 (いずれも男女)・非行少年 (男女, 平均18歳)	対象感情 (美的感情: 美的快因子, 力量・緊張因子, 無力・弛緩因子), 対象感情語の意味特性・意味判断, 非行
中村 勝	1971	質問紙 (SD法)	勤労青年 (20歳, 25歳, 30歳の男女)	感情 (地域社会に対する住民感情 [地域社会の開放性, 便利さ, まとまり, 緊張性, 価値, 品格, 清潔さ, 近代性, 新鮮さ, 落ち着き, 安全性, 安全性, 信頼性] に対する住民感情)
岩下 豊彦	1972	質問紙 (SD法) 実験法 (一対比較法)	大学生 (男女)	情緒の意味空間, 音楽に対する嗜好感情調 (緊張, 弛緩, 興奮, 沈静, 明・暗)
山内 弘継	1978	実験法 (感情表現語のカード分類, アナグラム遂行課題)	大学生	感情表現 (言語的手がかり [感情表現語] による成功感・失敗感の表現)
濱 保久 三 根 浩 松山 義則	1979	質問紙	大学生 (男女)	性的語 (言語的性的刺激) およびそれに含まれる感覚的・情動的意味
井上 弥 藤原 武弘 石井 眞治 村本 明子	1984	実験法 (顔面表情写真)	小学生・大学生 (いずれも男女)	非言語的コミュニケーション (顔面表情の表出能力・認知能力 [非言語的なレベルでの感情の表出能力と認知能力]), 感情 (喜び, 恐れ, 悲しみ, 怒り, 嫌悪)
大淵 憲一 小倉 左知男	1985	質問紙	大学生・社会人 (いずれも男女)	怒り (怒りの対象, 被害, 原因の評価, 怒りに伴う反応, 怒りの動機)
齊 藤 勇	1985	質問紙	大学生 (男女)	対人感情 (好意, 慈愛, 優越, 軽蔑, 嫌悪, 恐怖, 尊敬, 劣等, 尊敬, 特別的感情なし), 対人行動 (友好的行動, 依存的行動, 服従的行動, 回避的行動, 拒否的行動, 攻撃的行動, 支配的行動, 援助的行動, 相手の成功・失敗), 情緒 ※対人行動の相手の性も考慮。
齊 藤 勇	1986	質問紙 (同じ)	齊藤 (1985) に同じ	齊藤 (1985) に同じ

表 8-1 態度に関する研究(Ⅰ)-社会的態度-

著者	年号	方法	対象	測定された構成概念
田中 國夫	1953	質問紙	高校生・大学生 (いずれも男女)	社会的態度 (アメリカ人、ソ連人、中国人、朝鮮人、戦争A・B型、刑罰A・B型、死刑、禁酒、映画、スポーツ、男女交際、マルキシズム、キリスト教のそれぞれに関する意見文に対する賛同 (好意性等))
田中 國夫	1954	質問紙 (田中 (1953) から戦争・刑罰に関するB型の質問項目を削除)	田中 (1953) の一部	社会的態度 (田中 (1953) から戦争・刑罰に関するB型の質問項目を削除したもの。進歩主義-保守主義因子, 国家主義-非国家主義因子→R技法による因子分析)
松山 安雄 田中 國夫	1954	質問紙 (田中 (1953) から戦争・刑罰に関するB型の質問項目を削除)	田中 (1953) の一部	社会的態度 (田中 (1953) から戦争・刑罰に関するB型の質問項目を削除したもの。一般的世俗型因子, 反世俗型・自己主張型因子→Q技法による因子分析)
田中 國夫 松山 安雄	1955	質問紙	大学生・労働組合員・大学生父兄 (いずれも男女)・キリスト教徒 (女子)	社会的態度 (radicalism-conservatism因子, tough minded-tender minded 因子)
田中 國夫 松山 安雄	1957	質問紙	大学生 (男女)・中流サラリーマン家庭 (20歳から60歳までの男女)	社会的態度 (天皇に対する態度類型→家長的信頼型因子, 天皇否定型因子; 親に対する態度類型→純敬愛型因子, 批判的愛情型因子; アメリカに対する態度類型→アメリカの対日政策を批判しながらも, 世界分化のリーダーとして敬愛する類型因子, アメリカに対して批判あるいは非難する意見を持つ類型因子; 新中国に対する態度類型→単一類型 (幾分の疑惑を残しながらも, その建設的方向を認めようとする意見)), 家族成員間の態度布置
依田 新 久世 敏雄	1959	質問紙	中学生・高校生・中高生の高親 (いずれも男女)	社会的態度 (民主的-封建的 (政治社会問題), 合理的-非合理的 (一般社会の風潮), 精神主義的-功利的 (経済的問題), 教養主義的-利己的 (学校問題)), 親子関係 (社会的態度における青年-両親関係の類似性・相違性)
田中 靖政	1966	質問紙 (Behavioral Differential 法) (実験法)	日米大学生 (男女) イントロ人 (男子)	社会的態度 (社会行為 (社会的承認と服従因子, 友好的承認因子, 結婚因子)) ※比較文化的研究
久世 敏雄 浅野 敬子 後藤 宗理 二宮 克美 宮沢 秀次 宗方比佐子 大野 久 内山伊郎郎	1985	質問紙 (縦断的研究)	中学生・高校生 (いずれも男女)	社会的態度 (保守的態度, 革新的態度, 大衆社会的態度), 態度変化過程 (社会的態度の安定性・変動性)

表 8-2 態度に関する研究 (2) - 政治的態度 -

著者	年号	方 法	対 象	測 定 さ れ た 構 成 概 念
葛谷 隆正	1960	質問紙	大学生 (男女)	権威主義パーソナリティ、態度 (政党への支持、職業の評価)
秋葉 英則	1969	質問紙	中学生・勤労青年・大学生 (いずれも男女) 但し、中学生・勤労青年では都市青年と農村青年を含む)	政治的社会化 (社会・経済・政治的概念の認知、理解によって測定。→社会・経済・政治的概念では、生活意識と政治的行動を結ぶ媒介水準、イデオロギーの水準を含む。また、中性的概念では生活意識の水準を含む。)
広瀬 弘忠	1972	質問紙	中学生・高校生・大学生 (いずれも男女)	政治的社会化 (政治的知識・政治的態度)、政治的知識 (安保・自衛隊、憲法・労働運動・沖縄問題、日本の政治・経済・外交、アメリカの政治・経済、アメリカの軍事・外交についての知識の有無)、政治的態度 (安保・自衛隊、アメリカの軍事・外交、アメリカの政治・経済、日本の政治・経済・外交、沖縄・平和運動、日本の軍国主義についての態度 (賛成・反対))
原田 唯司	1982	質問紙 面接法	中学生・高校生・大学生 (いずれも男女)	政治的態度 (政治志向 [保守的態度・革新的態度]、政治に関する意見・考え方、政治への関心・満足度、政治的行動 [経験の有無・意志の程度]、政治への関与 [積極的・消極的])
原田 唯司	1984	質問紙	大学生 (男女)	政治的態度 (政治志向 [平和・民主主義志向、変革志向、保守志向]、政治への関与 [政治参加、政治的情報への接触]、政治的感情 [政治的満足感、政治的関心、政治的有効性感覚]、生活意識 [生活満足感 (授業、友人関係、自分自身、学校生活全般、家庭生活全般の各領域に対する満足感)、疎外感])
原田 唯司	1985	質問紙	大学生 (男女)	政治的態度 (ナショナルリズム、体制維持、統制・管理、ミリタリズム、変革主義を意味する語句に対する評価 [良い一悪い])、政治的知識 (現実的政治ダイナミクスに関する知識、制度や機構についての理解)、政治的関心、政党好意度、政治満足度、政権交代の希望の程度
原田 唯司	1989	質問紙	大学生 (男女)	パーソナリティ・認知特性 (あいまいさへの不寛容)、政治的関心 (政治的情報への接触、政治への関与)、政治的態度 (政治的意味が付与された社会的対象に対する態度：国家主義、復古主義、変革主義、体制維持)

表8-3 態度に関する研究(3)-その他-

著者	年号	方法	対象	測定された概念
葛谷 隆正	1955	質問紙	大学生・成人 (いずれも男女)	態度 (諸民族に対する好悪感情及び接触の仕方)
原谷 達夫 松山 安雄 南 寛	1960	質問紙 (文章完成法 を含む)	小学生・中学生・高校 生・大学生	態度 (諸民族に対するステレオタイプ及び好悪感情)
葛谷 隆正	1960	質問紙	大学生 (男女)	態度 (諸民族に対する好悪感情及び優劣観), パーソナリティ (偏見的人格, 外国人びいき, 自己嫌悪感)
佐野 勝男	1950	質問紙	大学生 (男女)	態度 (文学及びスポーツに対する態度 (好意度)), 性度 (男性度・女性度), 両親の教育程度
北脇 雅男	1955	質問紙 (実験法)	中学生・高校生・大学 生・成人・職業指導所 生 (いずれも男女)・ 洋裁学校生 (女子)	態度 (職業に対する態度), 技能, 学力, 就職意識, 進路希望, 集団間における職業態度の差異
塩川 武雄	1958	質問紙	小学生・中学生 (いずれも男女)	態度 (原水爆 (実験) についての認識, 理解)
岡路 市郎	1958	質問紙 (実験法)	大学生・社会人 (いずれも男女)	生活態度 (虚無的・消極的・運命論的態度因子, 感覺的・実利的・個人主義的態度因子, 建設的・精神的・社会中心 的態度因子, 平凡・安易な小市民的態度因子), 態度変容 (集団討議による青年の生活態度の変容, 青年の生活態度 の易变性)
古谷 妙子	1958	質問紙 (実験法)	高校生 (男女)	態度変容 (への抵抗), 集団基準 (態度構成条件)
松岡 武	1960a	言語連想法	中学生・高校生 (いずれも男女)	集団態度 (民族, 政治経済, 社会階層 [地位], 身近かな人間関係, 社会理念, その他の社会現象という6領域に関 する刺激語に対する言語連想から態度を測定)
井上 和子 田中 国夫	1973	質問紙 (7件法)	大学生 (男女)	態度 (献血・喫煙・カンニング・婚前の性的交渉・させるに對する態度), 社会規範 (信念としての社会規範: 家族, 仲間・友達, 世間の人々が前述の5つの行為をとることを期待しているか), 知覚された準拠する他 者のその行為に對する態度, 行動意図, 行動 (現実の経験) ※行動の予測因
井上 和子 田中 国夫	1975	質問紙 (9件法)	大学生 (男女)	態度 (一般教養の授業・チャペルの欠席に對する態度, 状況に對する態度), 行動 (報告された過去の行動及び實際 の行動), 習慣, 社会規範 (信念としての社会規範), 行動意図 ※行動の予測因
工藤 力	1974	質問紙 (実験法)	大学生 (女子)	態度変容 (死刑に對する態度, 役割演技による態度変化, 私的態度と賦与された役割での主張との間の discrepancy)
岡本 淑人	1988	質問紙	大学生・大学生の両 親 (いずれも男女)	態度 (迷信・格言に對する態度), 親子関係 (迷信・格言に對する態度に關しての親子間の類似性)

視点で研究される構成概念であると考えられる。

⑥生活感情・情緒

生活感情・情緒に関する研究は、「孤独感・疎外感・充実感」、「情緒その他」に分類し、整理された（表7-1, 表7-2を参照）。

孤独感・疎外感・充実感 孤独感・疎外感・充実感に関する研究は、表7-1に示されるとおりである。この領域においては、孤独感、疎外感、充実感、生活感情などが構成概念として挙げられる。生活感情は、前の3者を包含する上位の概念であると考えられる。しかし、概念間の関係、概念定義については必ずしも一貫していない傾向が伺われる。

孤独感に関しては、落合の一連の研究によって、孤独感の類型、内包的構造が明らかにされている。また、落合は孤独感を青年期発達の視点から積極的にとらえようとしている。孤独感研究における他の側面としては、中村（1986）が原因帰属という孤独の認知的側面を取り上げている。また、工藤（1986）は孤独感を引き起こす直接的な出来事（状況）と孤独感への対処行動を加え、孤独感を感情の喚起からそれが引き起こす行動までの一連の過程の中で扱おうとしている。しかし、質問紙による測定のため、認知された自己の側面をとらえているに留まり、認知から行動までの過程を扱うことは出来ない。

疎外感に関しては、宮下・小林（1981）や落合（1983）、落合（1985）で研究されている。しかし、落合（1983）では、疎外感が孤独感の下位概念として扱われており、概念上の独立性が問題となっている。

充実感に関しても同様の傾向が伺える。大野は、充実感の下位概念として、様々な生活感情と自己概念、自己評価を含めている。その結果、充実感という構成概念は、生活感情の中の1つではなくなっている。しかし、大野は充実感を青年の健康な自我同一性の実感であるとしており、その意味で生活感情である充実感を青年の自我発達の中に積極的に関連づけて扱おうとしている。

この領域においては、概念の定義上の問題が残されている傾向が伺われるが、また同時に青年期発達における生活感情の位置づけも明確にされる必要があると思われる。

情緒その他 情緒その他に関する研究は、表7-2に示されるとおりである。ここでは、生活感情としては位置づけられない情緒一般と、美的情操、色彩感情、表情による情緒表出、対人感情などが含まれている。これらは、感情の様々な側面を測定しているため、構成概念として

も整理されてはいない。しかし、青年期発達を考慮するならば、情緒における認知的発達の側面を重視した、星野（1958）、松岡（1960）、星野（1970）、そして、井上・藤原・石井・村本（1984）らの研究に注目する必要がある。

⑦態度

態度に関する研究は、「社会的態度」、「政治的態度」そして、「その他」に分類された（表8-1～表8-3を参照）。

社会的態度 社会的態度に関する研究は、表8-1に示されるとおり、因子論的研究が多い傾向が伺える。しかし、社会的という場合の社会に相当する部分に関しては、対象が必ずしも単一ではなく、多くの内容を含んでいることが分かる。

ここで挙げられた社会的態度研究に含まれている重要な視点としては、因子に示される基本次元の抽出、社会性発達・社会化の視点（依田・久世, 1959; 久世・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗方・大野・内山, 1985）、比較文化的視点（田中, 1966）などが挙げられよう。

政治的態度 政治的態度に関する研究は、表8-2に示されるとおりである。研究数としては、比較的少ない傾向にある。しかし、政治的態度は構成概念としては、社会的態度の下位概念に位置づけられると考えられる。

この領域に示されている、上位の構成概念は政治的社会化ではないかと考えられる。これは、社会的態度を社会化（あるいは社会性発達）の過程の中でとらえようとするものである。政治的という場合の政治に相当する対象は様々であるが、全体として、政治的知識（理解度）、政治的関心、政治志向、政治的行動、政治的関与、政治的感情（満足度など）が政治的態度を構成するものとして共通性を持つものと考えられる。

その他 その他の態度に関する研究に関しては、表8-3に示されるとおりである。ここでは、数多くの対象に対する態度研究や、態度変容の研究、行動の予測因としての態度研究などが含まれている。青年期発達に関しては、特に岡路（1958）が、集団討議の実験によって青年の生活態度の変容に関する易変性を指摘している。また、北脇（1955）は、職業に対する態度の集団間における差異を指摘し、発達の問題を検討している。（平石賢二）

II. 青年心理学の課題

青年心理学は、青年の意識と行動を心理学的に分析す

ることにより、青年の理解を目的とする。子どもから大人への過渡期である青年期は、心身の変化が著しく、人格の構造が再体制化される時期である。したがって、青年心理学の課題は、過渡期の変化の特徴を明らかにし、それが人格形成に及ぼす影響を明らかにすることである。

ここでは、青年心理学の課題をこの道筋に沿って、

- (1) 青年期は子どもから大人への過渡期であるといわれるが、この過渡期はヒトの生涯発達にとってどのような意味があるのか、
- (2) 過渡期の性格とその意味—過渡期には心身の発達が著しいが、この内実は何なのであるか、過渡期には青年はどのような変化が生じているのか、過渡期の性質は何か、それにはどのような共通性と異質性があるのか、その意味は何か、
- (3) 青年期の人格的成熟—過渡期は人格再構成の時期であるといわれるが、児童期から青年期にわたって変化する青年期の人格的成熟ないし自我の成熟とはどのようなものであるのか、どのような概念を使用することによって、それらを理解することができるのか、
について検討することを目的とする。

1. 過渡期の意義

(1) 成熟への生成 becoming の時期

青年期は、子どもから大人への過渡期であるが、この過渡期は、ヒトの完成にむかう成人期への生成の時期である。

ヒトは安全を求め、自己の足場を固めることによって、日一日と成長・発達を遂げていく。ヒトの生存にとってかかすことのできない動機が、このことを語っている。乳児の基本的要求である生理的要求が欠乏している状態を思い浮かべてみよう。乳児は、保護者にむかって自己の安全が確保される、生得的な行動—泣き叫び助力を求める、微笑みかける、保護者の動きを目で追うなどの行動—によって、保護者と絶えず相互作用する。こうして、自己の生存の安全を確保する。

さらに、歩行の可能になった幼児が、身の周りの世界を探索する過程をみると、このことはいっそう明白である。幼児は、保護者—母親を安全基地として行動する。幼児が新しい世界に好奇心を向け、新しい世界を発見するのは、母親が自分の近くにいる、その母親の存在を確認することから始められる。こうして、幼児はしだいに未知の世界を探索し始める。幼児が未知の世界を探索しないのは、自己の安全に対する恐れと不安が多いときである。

子どもは、自己の危険を最小限にして、成長への絶えまない歩みを続けている。子どもが成長の喜びを体験す

るのは、自分の安全が保証されているときである。このように、子どもの生活は、安全を求め、成長を求める行動の連鎖とすることができる。

子どもの成長と発達は、こうした生活の連続する過程として理解することができる。子どもは、未成熟から成熟へ、退行から進歩へ、依存から独立にむかって発達する。あるいは、成長を求め、価値実現、健康を求めている、つまり精神的健康を求めている、といってもよい。

ここでエリクソンにしたがって、生涯発達の視点から青年期の意味についてみてみよう。周知のように、エリクソンは、ライフサイクルとして乳児期から成熟期にいたる8つの段階を想定している。乳児期の基本的信頼感を獲得することから始まって、それぞれの時期における心理・社会的危機をのりこえ、自律性、自主性、勤勉性、同一性、親密性、世代性をマスターすることにより、老年期(成熟期)の統合性としての成熟にいたる。エリクソンが、青年期の心理・社会的危機として、同一性 identity 対 同一性混乱を指摘したことはつとに人口に膾炙しているが、これらの考察にもみられる通り、青年期を成熟期への生成の時期とすることは、大方の異論のないところであろう。

この点について、オースベルも青年期は基本的に存在 being の状態というよりは生成の状態である、と述べている。なお、この意味では、シュブランガーが了解・構造心理学の立場から、1920年代に青年期を生成の時期ととらえていることは、注目すべきことである。

(2) 成長・自立への時期

過渡期といわれる子どもたち—中学生や高校生の日常生活、授業での一挙一動をみても、家庭における親子の会話を聞いても、この時期の子どもは、自分というものを明らかに意識し始めている。自分を主張し始めている。自己承認を求める言動が多くなり、自分というものを新しい視点から評価し、また自己批判をすることがわかるのである。

こうした状態は、特定の時期の子どもたち—思春期にさしかかった子どもを観察していると、日常的なでき事である。

私たちはかつて、この時期の子どもたちの生活感情を素朴に質問したことがある。かれらの欲していること、期待していることを、成就、独立、愛情、社会的(仲間の)承認、所属(親密性)、経済的な要因の6種に分けて、それぞれの生活感情(気持)が同時に満たされないとき、その何れを選ぶかを—対比較させている。そうすると、中学生、高校生では、一律に成就への要求—私はやろうときめたことは、どんなに苦勞してもうまくなしとげたい、という生活感情がきわだっていた。つぎに、

独立への要求が多くみられていた。私は自分のいいたいことやしたいことを思ったままに行ないたい、という自己決定の動機である。

自己決定をしたいというこの要求は、中学から高校に進むにしたがって多くの者に選ばれており、社会的（仲間からの）承認、所属への要求は、高校で減少する傾向がみられていた。

この調査資料は35年前に実施されており、古いにもかかわらず、中学、高校生の生活感情の一端を素朴に示す、きわだった資料となっている。青年の自我成熟の1ステップとして読みとることができる。思春期に入った頃から、子どもは成就への目標と独立への志向 orientation の高まりがみられるのであり、自我意識が昂揚する。思春期にきわだってくる、これら自我の構成要素の主要なものは、今日の青年においても同様である、とみることができる。

子どもから大人への過渡期は、オースベルによれば、生物・社会的地位 biosocial status が変化することにより、パーソナリティの構造を再構成する時期である。過渡期の生物的地位の変化とは、思春期の子どもが身体的、性的に成熟することであり、成人としての身体と外観をもつことである。また社会的地位の変化とは、成人としての地位と役割をもつことである。つまり、大人としての権利と特権をもつこと、したがって義務と責任を負うことである。

身体的、性的成熟がどのようになされるか、という過渡期の性格については、次節の問題である。しかし、ここで身体的、性的変化による成人としての肢体が、周りの成人のかれ（またはかの女）をみる認知に大きな影響を及ぼすことに注目する必要がある。親は、一人前の成人として、自立し、成長し、行動して欲しいという期待を強くもつようになる。また、文化的遺産の伝達と世代の引継ぎがうまく遂行されるようにとの、社会的な要請と期待のあることも、明白である。

青年を認知する仕方が異なるようになり、親や社会の期待が異なってくるにしたがって、青年は、自己の内部の変化と呼応して、自我関与、自己への関心が高まってくる。過渡期は、成長と成熟にむかって自立と独立を求める時期なのである。そして、このプロセスは、人類の繁栄と進歩を保証する必然的な道筋である。

2. 過渡期の性格とその意味

(1) 過渡期の特徴とその意味

過渡期は青年にとって生成の時期であり、自立・独立の時期である。この時期は、個人の心理・社会的地位に重大な変化がおこる。自己の安全をこれまで保証してい

た子どもの地位は失なうが、新しい自己に相応しい地位はまだ確立していない。いところの境界的位置なのである。この過渡期的性格の特徴については、レヴィンの優れた分析がある。そこでも触れられているように、境界的位置におかれると、ひと（青年）は過度的不安 transitional anxiety が生じがちである。それらは、主として、これまでの行動の方向づけとして慣れ親しんできた重要な他者の承認を求める地位から、自己による選択と決断を要する地位、つまり人間固有の自己承認に基づく地位を得ることを社会的に期待されるようになること、さらに、社会的・文化的風土として、その地位を獲得する見通しと方略がはっきりしないためである。

以下、過渡期に内在する特徴とそこから派生する1・2の問題の検討から始めよう。

過渡期に内在する要因としては、過渡期が突然に始まること、さらに成長の割合が不一致なことである。身体的・性的思春期の変化は、周知のように急激に進行する。この生理的变化は、比較的短期間のうちに生ずるものであり、その本人と周りの親や成人の社会的圧力に刺激を与えるようになる。過渡期の始まりは、こうして思春期の開始以後にみられている。

思春期の変化がもたらすものは、親や社会の子どもの見方を一変させることである。親の承認を得ることで安定していた生活は、いまや成熟した行動をとることを要求され、大人としての責任ある行動をとることを求められる。周りの成人のかれらに対する期待も、同様に变化する。このことは、依存の生活から脱皮して、新しい人格の再構成が必要なことを示している。新しく期待される生活は、依存から独立へという方向性をもつ生活である。人格成熟へのこの方向転換は、急激に生ずるものである。生成期としての青年期は、こうした依存から独立への過程であり、自我の成熟にむかってパーソナリティ構造を再構成しなければならない課題と直面する。

過渡期に内在する第2の要因として、成長の割合が不一致であることを挙げることができる。思春期的な変化は、身体的・性的変化によるが、この成長の決定因は、知的、社会的、情緒的成熟をもたらす要因よりも恒常的である。それは、発生的なものであり、文化的条件とは独立である。これに対して、成長の他の諸機能は、どのような働きかけが効果をもつか、といった文化的期待の影響が大きい。そして、これらの機能の成熟は、各機能間にずれがあり、生理的・身体的成長のスパートのあとに、社会的、感情的なスパートがみられている。このほか、成長の割合の不一致は、さまざまな側面で観察される。

身体的・性的には成熟した成人であり、しかし、社会

性、情緒などの機能は、なお暫くの成熟にいたる時間が
必要である。この事実は、急激な成熟方向への変化を求
める社会的要請と交錯することにより、青年期の課題解
決にとって問題を生ずるものである。

青年期の期間が長くなっていることも、過渡期の特徴
として注目すべきところである。この時期は、自己の置
かれた地位が不明瞭な年齢段階である。個人は、児童期
の地位をあきらめる境界的な位置にいるが、成人として
の地位を獲得する過程である。この期間が未開社会の成
人地位を獲得する、イニシエーションの儀式的期間と同
じであればよい。しかし、現実の青年は、10数年にわた
って、この境界的な位置に立たされている。成人地位獲得
の方向性ははっきりしない、青年期の期間の長いことか
ら、過渡期的不安が生じている。

(2) 共通性と異質性

思春期には生理的、解剖学的な変化を生ずるが、とく
にホルモンのもたらす働きは、青年の情緒的、人格的発
達に意味がある。思春期の子どもは、かつて経験したこ
とのない新しい動因を自己の身体内部にもつのであるか
ら、自己の意識と感情に新しいタイプの効果が生ずる。
間接的には、かれの行動に影響を与える他者の期待が新
しくみられるようになる。

自己内部の変化と相対し、青年はこれに適応し、自己
の感情を社会的に好ましい仕方で統制する。かれは有機
体に起因する動因を処理するのであるが、青年の適応技
術にはかなりの一般性がある。抑圧、攻撃、退行、合理
化、投射、補償などは、比較的使用される防衛機制であ
る。その選択と頻度は、防衛行動に対して社会的に許容
される程度の函数である。

子どもの急激な変化に直面して、両親は、かれらと接
する態度に差異がある。しかし、自立・独立への志向を
受容するか拒否するか、過保護であるか、支配的である
かというように、親の態度にはある程度の共通性がある。
両親に育てられる子どもの経験にも、一般性があるとい
うべきである。パーソナリティ成熟の主要な基盤は、本
質的に共通性がある、といえるのである。

比較文化的資料によると、青年発達にはかなりの差異
がみられるが、パーソナリティ成熟は、ほぼ同様な目標・
方向に沿って進展する点で共通している。それは、自立・
独立への方向性である。このパーソナリティ成熟の方向
性と特質は、種の生存にとって、文化にとって適したも
のである。それらは、成人としての社会的・経済的地位
を獲得するために必要な、普遍的なものである。この方
向性は、子どもの世話を生涯続けることのできない両親
の期待であり、社会秩序を維持する新しい世代を準備し
なければならないとする社会的要請の反映である。

こうした過渡期の共通性にもかかわらず、あらゆる文
化と社会には著しい個人差が存在する。それらは、成人
成熟の目標と内容の差異、生理的起源をもつ動因と感情
を統制する方法の差異、その他青年の心理的過渡期は社
会的要因による影響が大きい、という事実から生じてい
る。

(3) 過渡期を促進する要因

発達の均衡状態を打破り、過渡期を推進するため
には、個人内に顕著な変化が生ずること—身体的変化、基
本的動因、知的・認知的能力の変化—が何よりも重要で
ある。変化した容姿、能力、要求がおかれた位置と不調
和になり、かれらの社会的地位をかえようとする社会的
要請の存在することも必要である。

個人的要因として機能するのは、知的、認知的、社会
的、適応的能力が発達してくることによるのはいうま
でもなく、成人としての身体的外観、家族を生み出すこ
とのできる生殖能力、性的動因と情緒の複合した大人とし
ての印象を与える成人性などである。このうち、後者の
働きは過渡期を促進する本質的な要因である。社会的要
因は、むしろ前提的条件である、というべきである。

子どもの人格的成熟を求める社会的期待は、子どもの
経済的援助を無限に果たすことはできない、とする両親
の能力の限界に由来する。過渡期は、文明社会では、新
しい世代が社会を維持し、生活するための準備期間とし
て必要であり、このことは、社会的に暗黙の合意がある
といえる。こうして社会の存続にとって重要な、青年の
人格特性がどのように形成するものであるかは、国家社
会の重大な関心事である。この期間に青年文化ないし若
者文化がどのように育っているか、さらにいえば、青年
期の期間はどの程度にするか、ということは、社会的要
請としての社会的要因がかかわることになる。

3. 青年期の人格的成熟

(1) 児童期は依存期

青年期のパーソナリティの発達は、乳幼児期・児童期
と比べてそれぞれに類似する側面がある。まず、急激な
発達の变化のもたらすものとして、乳幼児期と青年期は
成長の危機がある。両時期は自我発達の過渡期に当り、
意志的な葛藤—自己主張するか服従するか—がある。こ
の背景として、幼児期では子どもの非現実的な要求が目
立つのに対して、青年期では両親ないし社会がかれの
環境処理能力にみあった、相応わしい地位を与えないと
ころに原因がある。つぎに、青年期では身体内部に新し
い性の動因が活性化するので、それを社会化しなければ
ならないという点で、飢えと渇きの欲求充足、排泄の訓
練などの統制が必要な乳幼児期に類似している。他方、

表9 個 体 発 達 分 化 の 様 相

	自 主 性	心理社会的 危 機	自身を支える 人格的活力	環境処理 能 力	要求充足から みた重要な他者	安全を保証す る動機づけ	自己（意志）の 志向する目標	価値同化 の 方法
乳 児 期	身体的自立	基本的信頼感 と 基本的不信感	望 み	能力の 増 大	母または両親	重要な他者 の 承 認	依 存 傾 向	直接的強化 観 察 学 習 同 一 視
幼 児 前 期		自 律 性 と 恥 ・ 疑 惑	意 志					
幼 児 後 期	行動的自立	自 主 性 と 罪 惡 感	目 的 感					
児 童 期		勤 勉 性 と 劣 等 感	有 能 感					
思 春 期 青 年 期	精神的自立	同 一 性 と 同 一 性 混 乱	忠 誠 心	仲 間	自 己 決 定	独 立 傾 向	成 長 へ の 意 欲	

青年期は、環境処理能力の増大、即時的・快樂動機の減少、比較的長期にわたる目標が信頼できること、道徳的責任性などの点で、児童後期のパーソナリティ発達の方角と類似した特徴が示される。

筆者はかつて、ヒトの自立とは何か、乳幼児期から青年期にいたる発達に伴う自立の課題は何かを考察したことがある。そこでは、自立は身体的自立から始まって、行動の自立を獲得し、さらに精神的自立を達成するプロセスとして把握した。発達に伴う自立の課題は、エリクソンの心理・社会的危機および自我を支える人格的特質と関連して検討されている。表9は、乳幼児期から青年期までの個体発達分化の様相を示したものであり、自立性、心理・社会的危機、自我を支える人格的特質として示される。

児童期は、行動的自立の時期である。この時期は、運動能力や知的発達も相対的に発達しており、日常生活における環境に適応する能力は増加しており、表9に環境処理能力の増大として示されている。

日常生活での諸要求を充足することのできる能力という観点からみると、子どもが自分の要求を満足させることのできる重要な他者は、幼児期と同じように、依然として両親である。児童期は家族との生活が中心を占めているが、学校生活は、すでに始まっている。学校の仲間、近所の友だちとのつきあいも、なされている。したがって、この時期は“重要な関係の範囲”として近隣、学校をあげることもできるが、子どもの日常生活における基本的要求—なお生理的要求が多いのであるが—を満足させる他者は、両親とくに母親である、というべきである。

また、児童が成長するためには、自己の安全を保証する基地—自己のよりどころとなるもの—が必要である。子どもは、自己の安全を保証されて始めて成長への意欲をもつことができる。自己の安全を保証する動機づけ、自己のよりどころとする安全基地は、他者の承認を得ること—両親の是認を得ることである。子どもの行動の準拠は、親の承認、是認であり、両親が善いということは善いことである。悪いということとはよくないことである。

思春期以降の他者との関係についての調査資料は、手許のどの調査をみても、児童期の重要な他者は、家族—両親であることを推測させている。

このようにみえてくると、児童期は、子どもが生活する上で、運動能力、知的発達、社会的技能は相対的に能力不足である、といわざるを得ない。この時期は、環境処理能力は幼児期に比べると増大してきているが、生物・社会的にみて—要求充足からみた重要な他者および安全を保証する動機づけの志向性からみて、依存の時期であるというべきである。また、環境に適応する能力はあるとしても、性的に未成熟な個人は、成人社会において平等な社会の一員として認められていない、のが一般的傾向である。

児童期の、自己（意志）の志向する目標は表9に示したように、基本的に依存傾向である、ということができる。

(2) 自我の成熟

ひとのパーソナリティの中核となるものは、成長・発達過程において、ある程度の斉一性があり、安定するものでなければならない。また、それらは、ひとの主要

な行動の予測を可能にする性質のものでなければならない。さらに、それらは構造をなすものと仮定したとき、その中心的な位置を占めなければならない。これらの条件をみたまは、ひとの特徴のうち、自我の成熟と関連する特質であり、自己に意味を与えるパーソナリティの諸側面—態度、価値、動機、適応の特徴的な型などであろう。こうして、ひとの動機づけ、性格、価値観、信念体系などは、パーソナリティ構造の中核となる自我と関連した属性といえる。そして、それらは児童期に発達してきたパーソナリティ構造の中核をなす部分である。主要なパーソナリティの変化が青年期に生ずるとすれば、これらの属性(領域)でおこることを期待することができる。

こうして、日本の子どものパーソナリティ発達の典型は、思春期までの他者による承認を求める生活(依存傾向)から、思春期ならびに青年期において自己決定をする独立への生活史である。このことは、自我を支える動機づけとして、自己の安全を保証する動機傾向ならびに自己(意志)の志向する生活目標として示されている。自己の行動を支える判断の拠りどころは、児童期では重要な他者への依存であった。青年期では、自ら選択し、自己の意志にしたがって自己決定する、独立傾向である。

このようにみても、青年期の自我成熟の主要な課題は、意志的に独立を獲得すること、それ(本質的価値)に基づいた自己の目標構造を再構成することなどである。意志的独立を果たすということは、目標をひとりて計画し、自分で決定するようになること、内発的動機づけに基づいて、新しい価値を同化すること、要求不満に耐える能力を増大させること、自己を適切に批判する能力のできること、などである。本質的な価値に基づいた自己目標を設定するということは、意志的独立をするという成長への意欲をもつこと、自我の要求水準を高めること、その他自己の評価を高めること(自己を肯定し、自尊感情をもつこと)、などである。

これらは、成人としての権利を行使し、義務を遂行するのに必要な実行能力であり、これらの能力を備えることは青年期の基本的な課題である。

また、自我の成熟として、児童期からの特質を継続的に獲得すること—環境処理能力の増大—、日常の実行的独立を獲得すること、社会的基盤に基づいた道徳的責任の獲得、さらに即時的、快楽的動機づけを長期にわたる目標への動機づけにかえること、などがある。比較的長期にわたる目標への信頼は、エリクソンの表現をかりれば勤勉性の獲得である。これらは、青年個人にとって、さらに社会の存続にとって必要なパーソナリティの特質

であり、これら属性の質的な成熟が期待されている。

ここで、自我ないし人格の成熟を促進または疎外する要因について、家庭的ないし親子関係とかかわる条件と文化的・環境的条件にわけて簡単にみておこう。

環境的条件としての社会的要請と期待の一般的傾向は、個々の家庭を通して同化されていく。親の態度と子どもの反応は、種々さまざまであり、成熟の過程は、親子関係の各次元と密接にかかわっている。成熟と関係する親の態度と行動は、子どもを保護する程度、子ども(の積極性)を支配する程度および子どもの能力評価の程度などである。両親のこれらの態度は、子どもが価値を同化するさいの自由度、仲間との交渉技能の発達や独立の計画と目標設定における技能の発達などと関連しており、成熟に影響する。

子どもの意志的独立の達成は、自己の行動を最後までやり抜く能力、要求不満に耐える能力、現実的な目標を設定し、役割を遂行する能力、自分の地位・能力・成績を正確に評価できる能力、他者に正当な要求をする能力などとして結実する。こうした子どもが意志的に独立するのに必要な技能を発達させるためには、子どもは自ら計画を立て選択する機会を多くもつことが是非とも必要である。

成人としての地位をいつ認めるかは、社会的要請と期待の変数であり、また、青年が成熟した役割演技の経験を得る可能性の変数である。したがって、それは、青年の資質と能力を必要とする社会的・経済的要因に依存する。この要因の変動と一致して、社会は、青年の人格的成熟がなされる期間の長短を調節することがある。

こうした社会的要因のため、青年がこの時期をいかに過ごすか、青年文化—若者文化をどのようにつくり出していくかは、青年期の課題の1つである、といわなければならない。

(3) 人格的成熟のリズム

—価値同化の方法と関連して—

動機づけ、態度、技能、知識などの価値を同化していく—とり入れていく機制について、まずみよう。児童期では、対人的反応特性、情緒的、態度的諸反応、行動などは、両親の強化—しつけによるところが大きい。この時期では、すでに言語的技術を習得しており、言語的指導によって社会的規則や禁止すべき行動、さらにその意味などを学習することができる。また、モデルとの同一視 identification によって、モデルのもつ価値をとり入れていくこともある。青年期では、価値を同化する方略は、親の直接的強化によるよりは、いっそう間接的となり、能動的である。他者の価値基準、道徳性に関する行動基準は、観察学習 observational learning を通

して身につけていく。青年は、モデルから学ぶべき点を識別することのできる能力が発達しているの、積極的にモデルの長所を自らの中にとりいれることができる。

青年期の期間は長いので、青年は必然的に多様化した価値を選択しなければならない機会が多くなる。両親のもつ価値は、およそ社会的要請と一致したものである。しかし、青年文化—若者文化と呼ばれるものは、成人価値の下位文化であることもあるが、とくに若者文化は両親のそれとは異なる価値である。

社会的態度の調査によると、青年は、自ら抽象的、論理的に思考することのできる事柄と知識ではかなり合理的、批判的態度をとっている。ところが、家族生活として大切な近所づきあい、日常生活の交際技術などは、なかなか自分の判断をくださないか、あるいは両親の価値に近い。学校生活に必要な交際技術なども、自己の判断を保留する傾向がある。

さらに、人生観、生き方に関連した態度では、賛否、態度保留と三分された反応が得られている。人生いかに生きるか、といった問題は、なお時間をかけて解決していく姿勢がみられる。

また、価値の選択と決断に直面して、誰の意見にしたがうのがもっともよいことであると思うかについて質問すると、“両親の判断による”とするものから、自己決定をするのがもっともよいとする者にかわるプロセスであることが、明白である。価値を自分のものとするために生活の安全基地として誰を求めるとかを尋ねると、中学から高校にかけての青年は、自分である、自分で決定することである、というようになる。親や仲間の価値を同化するさい、自己の選択と決断による構えをここに読みとることができる。

最後に、価値の同化とかかわる基本的な問題の1つ—人格的成熟のリズムについてみておこう。

子どもは、依存から自立・独立という自我成熟の方向性に沿って発達していく。また、成人としての社会的地位を獲得する道筋が不明確なことからおこる過度的不安を体験するので、人格的発達のプロセスは、成長への方向性をとりながら、しかしさまざまな曲折を経て成人性を獲得していくタイプが一般的である。そこに、疾風怒濤の様相をみることができる。

さらに、さまざまな生活体験を契機にして、成人としての地位—急激に変容した、依存から独立へという人格的特性を身につけていくタイプがある。そのきっかけは、尊敬するモデルとの出会いであり、人生における至高体験をうることであり、宗教的な回心などである。こうした個性的な体験を通して、特定領域における個性は伸長していくことがある。

今1つのタイプをみてみよう。自我要求のきわめて高い青年がいる。かれは、目標にむかって必死の努力をすることがある。その目標は、立身出世であり、医師であり、大会社の重役など、さまざまである。その志向性は、内発的動機づけによることもあり、外発的なものであることもある。

以上、青年期の人格的成熟にいたる発達のリズムとして、3つの典型的なタイプをみてきた。青年を個別的・全体的に観察するとき、なおさまざまなタイプが見出されるであろう。

これら青年の人格的成熟にいたる発達リズムの検討も、残された課題の1つといわなければならない。

あとがき

青年心理研究の現状分析と課題の討論は、この報告にみられるとおり、次回「青年心理研究の現状と課題(Ⅱ)」において完結する運びとなった。

文 献

- 阿部孫四郎 1950 なかま及び指導者の理想性格の研究 心理学研究, 20, 37-43.
- 相川 充・大城トモ子・横川和章 1983 魅力と返報性に及ぼす自己開示の効果 心理学研究, 54, 200-203.
- 秋葉英則 1969 政治的社会化に関する一研究—青年期を中心として— 教育心理学研究, 17, 229-236.
- 安藤延男 1966 青年期における準拠集団の推移 心理学研究, 37, 219-229.
- 蘭千壽 1977 対面事態における均衡要因と一致性要因の比較 心理学研究, 48, 266-270.
- 蘭千壽 1982 対人感情と自他のパフォーマンス評価に及ぼす自他関係の効果 心理学研究, 53, 253-258.
- 青木邦子 1966 接触様式からみた親子の親近感情 教育心理学研究, 14, 88-102.
- Ausubel, D.P. 1954 *Theory and Problems of Adolescent Development*. New York: Grune & Stratton.
- 崔 光善 1985 現実自己と理想自己の認知的ずれが対人的評価に及ぼす影響についての日韓比較—女子高校生の場合— 教育心理学研究, 33, 87-92.
- 崔 光善 1987 教師の生徒に対する期待と生徒の自己期待がパフォーマンスに及ぼす効果 心理学研究, 58, 181-185.

青年心理研究における現状と課題(I)

- 遠藤公久 1989 開示状況における開示意向と開示規範からのズレについて—性格特徴との関連— 教育心理学研究, 37, 20-28.
- 遠藤由美 1987 特性情報の処理における理想自己 心理学研究, 58, 289-294.
- 榎本博明 1987 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 91-97.
- Erikson, E. H. 1982 *The Life Cycle Completed*. New York: Norton.
- 瀧上克義 1984 大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究 教育心理学研究, 32, 228-232.
- 瀧上克義 1986 進学意思決定に及ぼす対人的影響に関する研究 教育心理学研究, 34, 347-351.
- 瀧上克義 1987 地位流動状況における勢力保持者の勢力維持傾向に関する実験的研究 心理学研究, 57, 335-341.
- 瀧上克義 1989 地位構造の不安定性の強度が勢力保持者の勢力維持傾向に及ぼす効果 心理学研究, 60, 188-191.
- 藤原正光 1976 同調性の発達の变化に関する実験的研究—同調性におよぼす仲間・教師・母親からの集団圧力の効果— 心理学研究, 47, 193-201.
- 藤原 哲 1963 対人的認知構造の研究(I)—対人的態度の認知的交互作用過程— 心理学研究, 34, 163-171.
- 藤原 哲 1965 対人的認知構造の研究(III)—対人的態度の社会的共感性— 心理学研究, 35, 277-287.
- 藤原 哲 1977 対人的認知構造の研究(IV)—個人的構成概念関係強度の安定性と変動性— 心理学研究, 47, 325-333.
- 古川綾子 1974 両親のリーダーシップ行動認知に関する発達心理学的研究—子どもからみた理想像と現実像の変化について— 教育心理学研究, 22, 69-79.
- 古川雅文・藤原武弘・井上 弥・石井眞治・福田 廣 1983 環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達の研究 心理学研究, 53, 330-336.
- 古谷妙子 1958 態度の“変化に対する抵抗”についての実験的研究—態度構成条件と抵抗との関係— 心理学研究, 28, 260-268.
- 濱 保久・三根 浩・松山義則 1979 性的語に含まれる感覚的情動的意味 心理学研究, 50, 110-112.
- 浜田恵子 1963 大衆社会の価値観に関する社会心理学的研究: I —職業観をとおして— 教育心理学研究, 11, 129-141.
- 原田唯司 1982 青年期における政治的態度に関する一研究 教育心理学研究, 30, 12-21.
- 原田唯司 1984 大学生の政治的態度に関する一研究 教育心理学研究, 32, 148-152.
- 原田唯司 1985 政治的態度の構造と政治的関心, 政治的知識との関係について—大学生の場合— 教育心理学研究, 33, 327-335.
- 原田唯司 1989 あいまいさに対する不寛容, 政治的関心, および政治的態度の三者関係について 心理学研究, 60, 133-140.
- 原岡一馬 1957 学業成績に対する努力と家庭環境との関係 教育心理学研究, 4, 159-170.
- 原谷達夫・松山安雄・南 寛 1960 民族的ステレオタイプと好悪感情についての一考察 教育心理学研究, 8, 1-7.
- 林 文俊 1979 対人認知構造における個人差の測定(4)—INDSCALモデルによる多次元解析的アプローチ— 心理学研究, 50, 211-218.
- 林 文俊 1981 対人認知構造における個人差の測定(6)—認知者の性および年齢差についての検討— 心理学研究, 52, 244-247.
- 東 俊子・田中久子・土屋和子 1973 性役割認知の発達 教育心理学研究, 21, 48-53.
- 広瀬弘忠 1972 政治的社会化過程における<政治的知識>と<政治的態度>の関連 心理学研究, 43, 238-250.
- 廣田君美 1953 集団の課題解決と Communication 心理学研究, 24, 105-113.
- 堀尾治代 1973 自我の強さの尺度に関する一考察—BarronのEsスケールとRPRSの関係について— 心理学研究, 44, 233-240.
- 星野喜久三 1958 美的情操に関する発達の研究 教育心理学研究, 6, 14-20.
- 星野喜久三 1969 表情の感情的意味理解に関する発達の研究 教育心理学研究, 17, 90-101.
- 星野喜久三 1970 感情語の意味判断に関する集団間比較 心理学研究, 41, 265-272.
- 細井啓子 1982 言語連想における青年の特徴—身体と性役割に関する概念— 心理学研究, 53, 158-164.
- 市村潤 1958 ロールシャッハ・テストと比較した図版Zテストについて 心理学研究, 29, 396-398.
- 今井芳昭 1982 勢力保持者の自己・対人認知を規定する要因について 心理学研究, 53, 98-101.
- 井上和子・広沢俊宗・田中國夫 1984 青年期における行動の予測因に関する発達の研究 心理学研究, 55, 95-101.

- 井上和子・田中国夫 1973 行動の予測因としての態度およびその他の変数に関する研究 (I) 心理学研究, 44, 195-206.
- 井上和子・田中国夫 1975 行動の予測因としての態度およびその他の変数に関する研究 (II) 心理学研究, 46, 39-47.
- 井上 弥・藤原武弘・石井眞治・村本朋子 1984 顔面表情の表出と認知における年齢的差異の研究 心理学研究, 55, 121-124.
- 五十里玉喜・岡田啓子・小口秀子・藤田美弥子・藤永保 1971 権威主義の形成過程—母子間の態度伝達— 教育心理学研究, 19, 139-151.
- 磯崎三喜年・高橋超 1988 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 心理学研究, 59, 113-119.
- 伊藤裕子 1980 女子青年の性役割観と父母の養育態度—大学生の職経歴選択を中心に— 教育心理学研究, 28, 67-71.
- 伊藤裕子 1981 女子青年の性役割意識の構造 教育心理学研究, 29, 84-87.
- 伊藤裕子 1986 性役割特性語の意味構造—性役割測定尺度 (ISRS) 作成の試み— 教育心理学研究, 34, 168-174.
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 146-151.
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53, 54-57.
- 岩熊史朗・楨田 仁 1989 個人のセルフ・イメージの構造—大学生を被験者としたWAI反応の相互関連性の分析— 心理学研究, 60, 237-244.
- 岩下豊彦 1961 対人感情およびその知覚の機制に関する基礎的研究 I—基礎的仮説— 心理学研究, 32, 84-96.
- 岩下豊彦 1963 対人感情およびその知覚の機制に関する基礎的研究 2—自我像に関する感情— 心理学研究, 34, 59-73.
- 岩下豊彦 1964 対人感情およびその知覚の機制に関する基礎的研究 3—他者→自己, 他者→他者の対人感情の知覚— 心理学研究, 35, 57-69.
- 岩下豊彦 1968 対人感情およびその知覚の機制に関する基礎的研究 4—社会的適応に関して好ましいもしくは好ましくない徴標であると認知されるものが人格特徴として含まれる他者に対しての好悪感情生起機制— 心理学研究, 38, 311-321.
- 岩下豊彦 1972 情緒的意味空間の個人差に関する一実験的研究 心理学研究, 43, 188-200.
- 梶田叡一 1967a 自己評価と自己のパフォーマンスの評価—他者に感じる魅力を規定する要因として— 心理学研究, 38, 63-72.
- 梶田叡一 1967b 他者についての概念化と対人感情 心理学研究, 38, 284-289.
- 梶田叡一 1970 両親との葛藤状況における子どもの反応様式—反応様式の構造および若干の規定因について— 心理学研究, 41, 67-77.
- 神作順子 1963 色彩感情の分析的研究—2色配色の場合— 心理学研究, 34, 1-12.
- 柏木恵子 1967 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, 15, 193-202.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知 II 教育心理学研究, 20, 48-59.
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知 (III)—女子学生青年を中心として— 教育心理学研究, 22, 205-215.
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 加藤 厚 1986 同一性測定における2アプローチの比較検討 心理学研究, 56, 357-360.
- 加藤 厚 1989 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究 心理学研究, 60, 184-187.
- 加藤和生 1987 人格特性語の再生・再認に及ぼす自己照合, 自己関連性及び自己関与の効果 心理学研究, 58, 49-53.
- 加藤隆勝・返田 健 1961 青年の自己像, 理想的自己像および理想的異性像に関する一考察 教育心理学研究, 9, 1-8.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980a 青年期における自己概念の特質と発達傾向 心理学研究, 51, 279-282.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980b 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 川岸弘枝 1972 自己受容と他者受容に関する研究—受容測度の検討を中心として— 教育心理学研究, 20, 170-177.
- 木下稔子 1964 集団の凝集性と課題の重要性の同調行動に及ぼす効果 心理学研究, 35, 181-193.
- 北脇雅男 1955 職業集団の態度形成におよぼす要因の分析的研究 教育心理学研究, 3, 100-106.
- 越 良子 1990 セルフ・イメージ・バイアスの生起過程における自尊欲求の機能 心理学研究, 60, 394-398.
- 工藤 力 1972 認知的選り好みに関する一試行—対人感情の側面からの分析— 教育心理学研究, 20,

- 119-123.
- 工藤 力 1974 態度変容に及ぼす役割演技の効果(1) - discrepancy の観点から - 心理学研究, 45, 209-214.
- 工藤 力 1986 思春期の孤独感に関する研究 心理学研究, 57, 293-299.
- 栗原輝雄 1971 肢体不自由児の目標設定行動における自己概念の安定性の役割に関する研究 教育心理学研究, 19, 163-175.
- 久世敏雄(編) 1989a 青年の心理を探る 福村出版
- 久世敏雄(編) 1989b 青年期の社会的態度 福村出版
- 久世敏雄・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・大野久・内山伊知郎 1985 青年期の社会的態度に関する縦断的研究 - 個人の変化過程の分析 - 教育心理学研究, 33, 11-21.
- 久世敏雄・久世妙子・長田雅喜 1980 自立心を育てる 有斐閣新書
- 楠見幸子 1989 二者関係における選択パターンおよびその変化と心理的特性の相互理解との関連 心理学研究, 60, 9-16.
- 葛谷隆正 1955 諸民族に対する好悪の態度の研究 教育心理学研究, 3, 39-57.
- 葛谷隆正 1960a 民族的好悪とその人格的要因 教育心理学研究, 8, 8-17.
- 葛谷隆正 1960b 人格的構造と政党および職業に対する態度との関係について 教育心理学研究, 8, 144-151.
- Lewin, K. 1951 *Field Theory in Social Science*. Harper & Brothers.
- 間宮 武 1956 性的発達臨界期に関する問題 - 中間報告 - 教育心理学研究, 4, 21-27.
- 間宮 武 1959 性差研究(第2報告) - 性差研究の体系化と性差意識に関する研究 - 教育心理学研究, 6, 205-216.
- 松原達哉 1966 生まれ月からみた児童・生徒の心身の発達差に関する縦断的研究 教育心理学研究, 14, 37-44.
- 松田君彦・広瀬春次 1982 青年期における自己像と自我同一性 教育心理学研究, 30, 157-161.
- 松井豊 1981 援助行動の構造分析 心理学研究, 52, 226-232.
- 松本芳之 1987 相互依存関係における暗黙の調整 心理学研究, 58, 211-217.
- 松岡 武 1960a 色彩象徴法と言語連想法による感情の発達系譜に関する研究 教育心理学研究, 7, 227-235.
- 松岡 武 1960b 言語連想法による態度測定を試み 心理学研究, 31, 237-242.
- 松山安雄・田中國夫 1954 社会的態度の測定論的研究 III - 社会的態度に於ける類型因子について - 心理学研究, 25, 174-180.
- 三木安正・久原恵子・波多野誼余夫・高橋恵子 1969 双生児による人格形成の研究: III - 双生児の友人関係の発達 - 教育心理学研究, 17, 193-202.
- 宮野祥雄 1981 非行少年の自己概念 - Q-テクニックによる分析 - 教育心理学研究, 29, 10-19.
- 宮野祥雄 1984 青年期における親への同調と対立に関する研究 心理学研究, 55, 261-267.
- 宮下一博 1987 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, 35, 253-258.
- 宮下一博・小林利宣 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究, 29, 297-305.
- 宮沢秀次 1988 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, 36, 258-263.
- 水原泰介 1952 協同と競争に関する実験的研究(II) - 意見の変化に及ぼす影響 - 心理学研究, 23, 170-172.
- 森下正康 1979 子どもの親に対する親和性と親子間の価値観および性格の類似性 心理学研究, 50, 145-152.
- 森下正康 1982 中学生における親の養育態度と対人特性の同一視 教育心理学研究, 30, 142-146.
- 諸井克英 1985 高校生における孤独感と自己意識 心理学研究, 56, 237-240.
- 村山久美子 1977 自由記述に現われた対人認知の発達の研究(1) 心理学研究, 48, 1-6.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-187.
- 長尾 博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み 教育心理学研究, 37, 71-77.
- 永田良昭 1980 集団規範への同調および逸脱を規定する要因としての地位について 心理学研究, 51, 152-159.
- 長戸啓子 1973 自己評価, 他者からの評価, および対人的態度の関係に関する一研究 - コミットメントおよび協同・競争の効果について - 心理学研究, 44, 115-123.
- 中村 薫 1986 孤独感の原因帰属に関する研究 - 自己の場合と他者の場合 - 心理学研究, 57, 141-148.
- 中村雅彦 1984 自己開示の対人魅力に及ぼす効果 心

- 心理学研究, 55, 131-137.
- 中村雅彦 1986 自己開示の対人魅力に及ぼす効果(3)
—開示内容次元と魅力判断次元の関連性に関する検討— 心理学研究, 57, 13-19.
- 中村 勝 1971 地域社会に対する勤労青年の住民感情の分析 心理学研究, 42, 208-216.
- 中里浩明 1977 魅力形成における人格特性の次元 心理学研究, 47, 324-347.
- 中里浩明・井上 徹・田中国夫 1975 人格類似性と対人魅力—向性と欲求の次元— 心理学研究, 46, 109-117.
- 中里浩明・Michael H. Bond・白石大介 1976 人格認知の次元性に関する研究—Norman 仮説の検討— 心理学研究, 47, 139-148.
- 中里浩明・田中国夫 1973 対人態度の感情構造に関する研究 心理学研究, 44, 92-96.
- 新田健一 1955 特殊な閉鎖集団における Socio-types の分析 心理学研究, 26, 274-276.
- 野上芳彦 1956 性度に関する諸問題(Ⅰ), 年齢と性度 心理学研究, 27, 131-134.
- 落合良行 1974 現代青年における孤独感の構造(Ⅰ) 教育心理学研究, 22, 162-170.
- 落合良行 1982 孤独感の内包的構造に関する仮説 教育心理学研究, 30, 233-238.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成 教育心理学研究, 31, 332-336.
- 落合良行 1985 青年期における孤独感を中心にした生活感情の関連構造 教育心理学研究, 33, 70-75.
- 小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 27, 272-281.
- 小川一夫・田中宏二 1980 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 28, 328-331.
- 小口孝司 1989 開示者のパーソナリティについての開示者・受け手による判断の一致度と自己開示動機との関係について 心理学研究, 60, 224-230.
- 岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116-121.
- 岡田 努・永井 徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連 心理学研究, 60, 386-389.
- 岡路市郎 1958 青年の生活に対する態度の特質に関する研究 教育心理学研究, 6, 7-13.
- 岡本淑人 1988 迷信・格言への態度と行動 心理学研究, 59, 106-112.
- 大淵憲一・小倉左知男 1985 怒りの動機—その構造と要因及び反応との関係— 心理学研究, 56, 200-207.
- 大橋正夫 1956a 選択行動と対人的知覚の研究(Ⅰ)—他の成員の自己に対する感情および人気の知覚— 心理学研究, 27, 36-45.
- 大橋正夫 1956b 選択行動と対人的知覚の研究(Ⅱ)—他の成員の別の成員に対する態度の知覚— 心理学研究, 27, 193-203.
- 大橋正夫 1958 選択行動と対人的知覚の研究(Ⅲ)—関係知覚における集団構造化の要因— 心理学研究, 29, 235-245.
- 大平勝馬 1953 女子青年における性徴の一位相と性格との関連に関する研究 教育心理学研究, 1, 109-115.
- 大平勝馬 1955 身体成熟度とロールシャッハ反応との関係 心理学研究, 26, 106-110.
- 大平勝馬 1956 手根骨X線像計測による身体的成熟度決定基準とその妥当性 教育心理学研究, 4, 67-78.
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, 32, 100-109.
- 大里栄子 1983 3人集団内2者間の競争と協同が第3成員に及ぼす効果—心拍数, 問題解決, 認知反応を指標として— 心理学研究, 54, 293-299.
- 大山 正・田中靖政・芳賀 純 1963 日米学生における色彩感情と色彩象徴 心理学研究, 34, 109-121.
- 大石明子 1962 親子関係の規範意識と実践意識について—その社会的要求性との関連— 教育心理学研究, 10, 215-224.
- 小野寺敦子 1984 娘からみた父親の魅力 心理学研究, 55, 289-295.
- 斎藤 勇 1973 社会的地位, 集団内, 集団外関係と攻撃的行動—日本社会において— 心理学研究, 44, 150-155.
- 斎藤 勇 1985 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, 56, 222-228.
- 斎藤 勇 1986 対人感情と対人行動と情緒の関連 心理学研究, 57, 242-245.
- 斎藤 勇・井上隆二 1971 協同・競争と自己評価 心理学研究, 42, 147-152.
- 斎藤 勇・児玉昌久・潮田武彦 1972 内集団関係・外集団関係における個人間の協同・競争(Ⅰ) 心理学研究, 42, 310-314.
- 斎藤久美子 1959 自己意識の分析による人格適応性の一研究 心理学研究, 30, 277-285.

- 齊藤誠一 1985 思春期の身体発育と性役割意識の形成について 教育心理学研究, 33, 336-344.
- 佐野勝男 1950 青年學生の「文學」に對する態度の測定 心理学研究, 20, 27-32.
- 佐々木正宏 1981 S C Tによる女子青年の自我発達の測定 教育心理学研究, 29, 147-151.
- 佐々木正人・福島脩美 1979 自己強化手続きによる自己評価基準の形成と正反応の増大 心理学研究, 50, 136-144.
- 佐藤 功 1970 コミュニケーション過程と認知的体制化 I - cognitive tuning の検討 - 心理学研究, 41, 173-181.
- 関 計夫・三隅二不二・岡村二郎 1954 学生野球チームのグループ・ダイナミックス的研究 - 第一報告 - 教育心理学研究, 2, 129-140.
- 柴田 薫 1979 生活意識における親子間の世代差の発達的研究 教育心理学研究, 27, 141-145.
- 渋谷昌三 1976 社会空間の基礎的研究 心理学研究, 47, 119-128.
- 椎野信治 1966 適応の指標としての自己概念の研究 教育心理学研究, 14, 165-172.
- 清水栄長 1956 年齢と歩行および連想のテンポ 心理学研究, 26, 402-405.
- 清水弘司 1979 大学生における性の発達と依存対象について 心理学研究, 50, 265-272.
- 下仲順子 1980 青年群との対比における老人の自己概念 - 世代差, 性差を中心として - 教育心理学研究, 28, 303-309.
- 下斗米淳 1988 社会的フィードバックが受け手の自己概念変容に及ぼす効果 - 送り手についての受け手の認知が果たす役割 - 心理学研究, 59, 164-171.
- 塩川武雄 1958 原水爆実験に対する青少年の態度とその及ぼす心理的影響 教育心理学研究, 6, 65-76.
- 塩田芳久 1955 交友関係が行動の相互評価に及ぼす影響 教育心理学研究, 3, 30-38.
- 曾野佐紀子 1971 他者のパーソナリティ把握における判断現象の分析 - 文章完成法 (S C T) を用いての Person Perception の一研究 - 心理学研究, 42, 185-196.
- Spranger, E. 土井竹治 (訳) 1973 青年の心理 五月書房
- 菅佐和子 1975 Self-Esteem と対他者関係に関する一研究 - 青年期を対象として - 教育心理学研究, 23, 224-229.
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求 - 公的自意識の強い人に見られる 2 つの欲求について - 心理学研究, 57, 134-140.
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27, 215-220.
- 橘 寿郎 1957 情緒研究法についての実験的考察 - 羞恥感を手がかりとして - 教育心理学研究, 5, 5-31.
- 田口孝之・徳田安俊 1959 家庭の雰囲気についての研究 心理学研究, 30, 243-252.
- 高田知恵子・高田利武 1976 能力の自己評価に及ぼすモデルの影響 - 社会的比較過程の 2 機能 - 心理学研究, 47, 74-84.
- 高橋恵子 1968a 依存性の発達的研究: I 大学生女子の依存性 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 高橋恵子 1968b 依存性の発達的研究: II - 大学生との比較における高校生女子の依存性 - 教育心理学研究, 16, 216-226.
- 高橋恵子 1970 依存性の発達的研究: III - 大学・高校生との比較における中学生女子の依存性 - 教育心理学研究, 18, 65-75.
- 高橋恵子 1973 女子双生児における依存の発達 教育心理学研究, 21, 242-247.
- 高橋恵子 1974 生活史にみる依存の発達 教育心理学研究, 22, 1-10.
- 高橋裕行 1988 同一性と親密性の危機の解決における性差 - 自我同一性地位の Rasmussen の EIS による併存的妥当性の検討 - 教育心理学研究, 36, 210-219.
- 高橋たまき 1961 要求水準決定におけるコンフリクトと自己保護 心理学研究, 32, 38-43.
- 竹村和久・高木 修 1987 順社会的行動の意思決定過程における認知の変化 心理学研究, 58, 144-150.
- 竹村和久・高木 修 1988 “いじめ” 現象に関わる心理的要因 - 逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性 - 教育心理学研究, 36, 57-62.
- 田中宏二・小川一夫 1981 親の期待と親への同一視が看護職の継承に及ぼす影響 教育心理学研究, 29, 166-170.
- 田中宏二・小川一夫 1982 教師職選択に及ぼす親の影響 - 子の認知した親の期待と職業モデル - 教育心理学研究, 30, 257-262.
- 田中熊次郎 1955 学級社会における「社会的共感性」の発達と変容 - 教育心理学におけるソシオメトリー発展の方向 - 教育心理学研究, 3, 133-145.

- 田中国夫 1953 社会的態度の測定論的研究Ⅰ 心理学研究, 24, 96-104.
- 田中国夫 1954 社会的態度の測定論的研究Ⅱ 心理学研究, 24, 277-284.
- 田中国夫・松山安雄 1955 社会的態度の測定論的研究(Ⅳ) - R. T. 因子について - 心理学研究, 26, 141-147.
- 田中国夫・松山安雄 1957 社会的態度の類型的分析 教育心理学研究, 4, 138-144.
- 田中靖政 1966 Behavioral Differential 法を用いた社会的態度の行動要素の分析 - 日米比較文化研究の一例 - 心理学研究, 37, 104-108.
- 飛田 操 1989 目標達成の困難度と対人魅力との関係について 心理学研究, 60, 69-75.
- 戸田和子・堅田弥生 1987 性役割受容の意識構造と、その習得過程に関わる父母・他人の効果 心理学研究, 58, 309-317.
- 戸田弘二・松井 豊 1985 大学生の愛着構造と異性交際 心理学研究, 56, 288-291.
- 徳田完二 1987 青年期における自己評価と両親の養育態度 心理学研究, 58, 8-13.
- 辻岡美延・山本吉廣 1978 親子関係の類型 - 親子関係診断尺度 EICA - 教育心理学研究, 26, 84-93.
- 塚野州一 1987 子どもにおける時間軸上の自己意識の発達 - 段階区分の検討 - 教育心理学研究, 35, 266-270.
- 續 有恒・久世敏雄・秦安雄 1959 青年の生活意識について 名古屋大学教育学部紀要, 第5巻, 170-177.
- 上田吉一 1964 自己および他人の能力認知に関する実験的研究 - クレペリン精神作業検査による人格の健康性との関連において - 教育心理学研究, 12, 97-104.
- 矢吹省二 1971 学業不振への自我心理学的接近 - 自我防衛としての学習阻害について事例をもとに - 教育心理学研究, 19, 210-220.
- 八木保樹・新延明 1989 課題を選択することが対人感情・評価に及ぼす効果 心理学研究, 60, 170-179.
- 山田ゆかり 1989 青年期における自己概念の形成過程に関する研究 - 20答法での自己記述を手がかりとして - 心理学研究, 60, 245-252.
- 山岸明子・無藤 隆 1979 道徳判断の発達に影響を及ぼす社会的相互作用の検討 - Role-Taking Opportunity の観点からの分析 - 心理学研究, 50, 219-226.
- 山口素子 1989 男性性・女性性の2側面についての検討Ⅱ - 自己期待と他者期待 - 心理学研究, 59, 350-356.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究 - 自我の二指向性の観点から - 教育心理学研究, 36, 238-248.
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究 - 青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討 - 教育心理学研究, 37, 302-311.
- 山根一郎 1987 心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析 心理学研究, 57, 329-334.
- 山内弘継 1978 言語手がかりによる感情・情動の心理的測定の試み 心理学研究, 49, 284-287.
- 依田 新・久世敏雄 1957 青年 - 両親関係 - 心理的離乳について 名古屋大学教育学部紀要, 第3巻, 100-127.
- 依田 新・久世敏雄 1959 青年 - 両親関係 - 社会的態度における親子の関係 - 教育心理学研究, 6, 229-237.
- 横塚怜子 1989 向社会的行動尺度(中高生版)作成の試み 教育心理学研究, 37, 158-162.
- 吉田富士雄・堀 洋道 1989 仲間集団の存在および視線遮断がパーソナル・スペースに及ぼす効果 心理学研究, 60, 53-56.
- 吉田富士雄・大本 進 1985 ゲーム相互作用場面の対人(集団)認知における集団成極化効果 - 社会的相互作用場面における対人認知の研究(4) - 心理学研究, 56, 86-92.
- 吉田寿夫 1984 対人認知における次元ウエイト 心理学研究, 55, 166-172.
- 吉川房枝 1960 青年期における自我の形成 教育心理学研究, 8, 26-37.
- 渡部雅之・山本里花 1989 文章完成法による自我発達検査の作成 - Loevinger の WU-SCT の翻案とその簡易化 - 教育心理学研究, 37, 286-292.

(1990年8月28日 受稿)

ABSTRACT

Issues in the Study of Adolescence (I)

Toshio KUZE, Kenji HIRAISHI, and Masatsugu TSUJII

The purposes of this article were to examine the present states and issues in the study of adolescence in Japan.

In part I, we reviewed 418 articles which were reported in The Japanese Journal of Psychology and The Japanese Journal of Educational Psychology. These were the studies whose subjects were adolescents (junior high school students, high school students, and college students). At first step in the analysis, we sorted these studies from the point of view of the theme. And we found 18 areas in the studies on adolescence. Subsequently, We examined these studies in each area and analyzed from three standpoints: 1) methods, 2) subjects, 3) psychological constructs.

In part II, we discussed the problems in adolescent development. And it was examined three points: 1) the meaning of psychological transition, 2) characteristics of psychological transition, and 3) personality maturity in adolescence.